宮平遺跡

—長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡発掘調査報告書—

遺　構　編

1985

御代田町教育委員会

宮平遺跡

—長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡発掘調査報告書—

遺　構　編

1985

御代田町教育委員会

1　D—19号土壙墓

2　宮平遺跡出土遺物

序　　文

北方に雄大な浅間山を，眼下には湯川の清流を臨み，八風山の懐に抱かれた宮平の地に，今から約四千年以上も昔に縄文時代人達の生活が営まれておりました。

中部高地は，縄文時代の中葉にあっては日本列島における人口の核地帯で，一大文化圏を形成していたと言われております。それは，なにより縄文時代人たちの生活が豊富な「山の幸」に依存するものであったからに他なりません。宮平の縄文人たちの生活も例に漏れず，ありし日には八風山に獣を追い，また，ありし日には湯川で魚を捕ったことでしょう。そうした宮平人達の食生活の様子は，彼らが捨てたゴミから推測できます。発掘された彼らの「ゴミ捨て場」からは，クマ・シカ・イノシシ・カエルなどの骨が大量に検出され，そうした動物たちが彼らの食前を賑わしていたことを物語っています。

さて，今回豊昇地区の農道舗装工事に伴って，この宮平遺跡の一部破壊が余儀なくされたため，緊急に発掘調査を実施し記録保存を取り行なう次第となりました。調査の結果，縄文時代中期後半からから後期にかけての竪穴式住居址27軒・土壙46基・土壙墓１基・石組み棺４基・礫群２基が，僅か道路幅の部分に累々と横たわっていることが確認されました。遺物としては，大量の縄文土器はもちろんのこと，打製石斧・石鏃などとともに，精神生活の証ともいえる土偶・石棒・耳飾りや翡翠の垂飾なども検出されました。そうした多量の遺構・遺物の，遺構についての成果をふれたのが本書であります。本書が貴重な文化遺産の記録の継承に役立ち，多くの方々に利用されることを願ってやみません。

実生活の向上もさることながら，貴重な文化遺産継承の義務を強く認識し，開発と保護の調和を計ってゆきたい所存であります。

末筆となりましたが，調査団長を快くお引き受け下さいました永峯光一先生をはじめ，厳寒の中調査にあたられた佐久考古学会有志の皆さん，郷土の歴史を自らの手で掘り起こそうとお手伝い下さった豊昇・広戸地区の住民の皆さん御苦労に対しまして，心から厚く御礼を申し上げます。

御代田町長

古　越　寅　男

序　　文

御代田町豊昇地区の西側は湯川の清流が岸を洗っているが，その東端の台地が宮平である。宮平は標高およそ800m，湯川よりおよそ50mの比高を測るが，ここは古くから出土遺物の豊富なことで知られ，既に旧村誌にもその記述があり，昭和６年には八幡一郎氏，それより前には軽井沢在中のN．G・マンロー氏も来訪され，昭和20年代後半には『信濃史料』編纂のための調査も行われた。更に農地構造改善事業の際には縄文時代後期の敷石住居址１軒の調査もされ，同じ湯川水系の軽井沢町茂沢南石堂遺跡と共に注目されていた。

先頃農道舗装が実施されるのに伴って，遺跡を記録保存するため昭和56年11月26日から昭和57年１月５日まで緊急発掘調査を当教育委員会で実施した。発掘調査によって住居址27軒・土壙50基，土器・石器当の遺物がダンボール箱に65箱という予想を上まわる量発見され，以来３年の間出土品の整理及び報告書の作成に当り，今日を迎えた訳である。この間佐久考古学会各位，佐久市教育委員会林学芸員を始め，町文化財産審議委員の皆さん，地元豊昇区，（延べ90名の無償奉仕），広戸区（延べ20名の無償奉仕）の皆さん他多数の方々の御協力を得た。

調査を終るに当り各位に心から謝意を表したい。

今回の調査を広大な宮平遺跡から見れば，小範囲の調査ではあったが，宮平遺跡の全容の一端を知り得たことと思う。今後，その成果を生かすと共に，県下でも有数の遺跡が，地元の方々の理解のもとで保存されていくことを祈念して御挨拶といたします。

御代田町教育委員会教育長

原　田　正　夫

例　　言

1　本書は，昭和56年11月26日より昭和57年１月５日にわたって発掘調査された，長野県北佐久郡御代田町大字豊昇字宮平に所在する宮平遺跡の発掘調査報告である。

2　今回の報告は，遺構についてのみで，遺物及び総括については次編で報告することとする。

3　宮平遺跡の調査については，概報（御代田町教育委員会　1983）及び長野県史考古史料編主要遺跡北・東信（林　1982）においてすでにふれられているが，それらと本書の内容が異なる場合本書を採用されたい。

4　本発掘調査は，永峯光一を担当者とし，佐久考古学会有志，豊昇・広戸地区住民，町職員，の協力をもって実施した。

5　遺構の実測図作成は各調査員があたった。

6　遺構の写真撮影は，主に林幸彦があたった。

7　遺構のトレスは，鳥居亮があたった。

8　本書の執筆は，堤　隆があたった。

9　本書の編集は，御代田町教育委員会の責任の基に，堤　隆が行なった。

10　発掘調査及び報告書刊行に際しては，以下の方々に御助言・御配慮をいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

臼田武正，高村博文，由井茂也，佐藤信之，児玉卓文，宮崎重雄，村沢正弘，諏訪間順，諏訪間伸，安藤史郎，福島邦男，花岡弘，前原豊，川島雅人，樫田誠

凡　　例

1　遺構の略称

J ——→　住居址

D ——→　土壙，土壙墓・石組み棺

R ——→　礫群

2　挿図の縮尺

各図毎に明示してあるが，遺構の縮尺は基本的には $1/60$ である。

3　挿図中のスクリーントーンは下記のものを表わす。

網点——→焼土

斜線——→遺構断面

目　　次

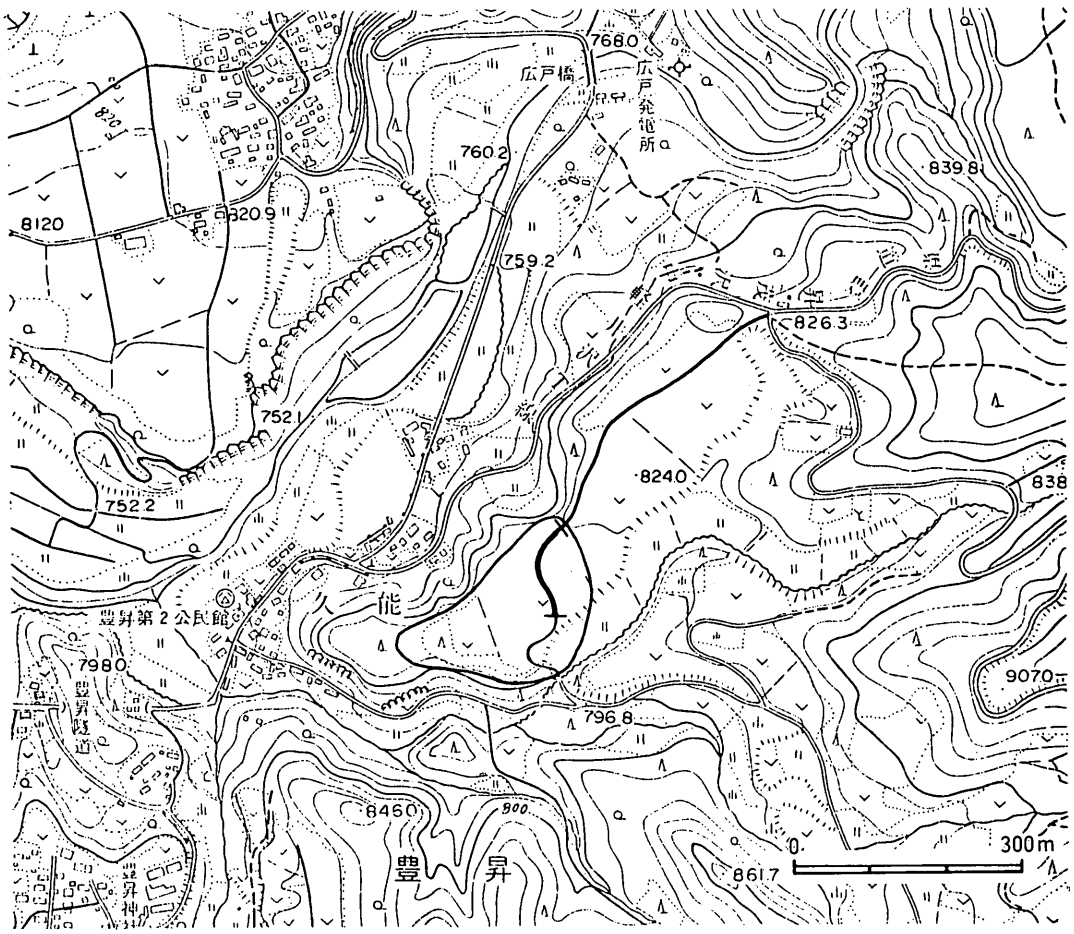
序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の経緯……1
　1　調査に至る動機……1
　2　発掘調査の概要……2
Ⅱ　遺跡の位置と環境……3
Ⅲ　層　序……6
Ⅳ　遺　構……7
　1　住居址……7
　2　土　壙……15
　3　炉を伴う土壙……19
　4　灰および骨片を伴う土壙……20
　5　土壙墓……21
　6　石組み棺……22
　7　礫　群……23
引用参考文献……24
図・図版……25

Ⅰ　発掘調査の経緯

1　発掘調査に至る動機

御代田町大字豊昇宮平において，昭和56年度農道舗装事業に際し，宮平遺跡の破壊が余儀なくされたため，御代田町教育委員会が主体となり佐久考古学有志及び地元豊昇地区・広戸地区・町職員・佐久市の方々の協力を得て，緊急に発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

（事務局）



第1図　遺跡の範囲と農道舗装区間〔黒線〕（1：10,000）

2　発掘調査の概要

遺跡名　宮平（みやだいら）遺跡

所在地　長野県北佐久郡御代田町大字豊昇字宮平1724～3他19筆

発掘期間　昭和56年11月26日～　昭和57年1月5日

整理期間　昭和57年5月4日～　昭和57年10月30日

昭和58年8月1日～　昭和58年8月31日

昭和59年2月1日～　昭和59年3月31日

調査団の構成

○事務局

教育長　大井紀夫（昭和58年7月31日退任）　原田正夫（昭和58年8月1日就任）

教育長　山本岩正

社会・同和教育係長　古越奉文（昭和59年1月10日退任）　萩原茂（昭和59年1月10日就任）

社会・同和教育係　内堀篤志　堤　隆（昭和59年10月1日就任）

○調査団

団　長　永峯光一

調査担当　永峯光一

調査主任　林　幸彦

調査員　工藤（森泉）かよ子，大井今朝太，森泉定勝，井上行雄，荻原範仁，前原豊，小島純一，新井真博，小坂井孝修，川島雅人（発掘調査）

原田政信，小山岳夫，白倉盛男，三石延雄，島田恵子（遺物整理）

調査補助員　飯島篤，三石宗一，橋詰武子，茂木智里，堤　隆（発掘調査）

文化財審議委員　尾台卓一，大井豊，桜井為吉，大沢俊雄，小林五郎，柳沢恒三郎

内山俊雄，山本宣夫，堀籠源

協力者　豊昇区民，広戸区民，役場各課，会計室，議会事務局（発掘調査）

並木ことみ，丸山勝子，掛川裕次，篠原浩江，井出絹枝，市来和子，田中智恵子，桜井昌子，篠原良枝，小須田明美，飯島広子，矢田陽子，三石伸之，柳沢操，細田徹，木内三千男，市川和彦，志摩聴，市川ことえ，相沢理加，井出英俊，柏木三宏，勝見宏明，上原幸徳，西藤洋一，長沼隆年，宮沢賢治，伴野剛，桐山敦，市川康行，滝沢次郎，北村武志，井上秀幸，角田一也，高橋千秋，吉田ゆかり，神部妙子，佐々木宗昭（遺物整理）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

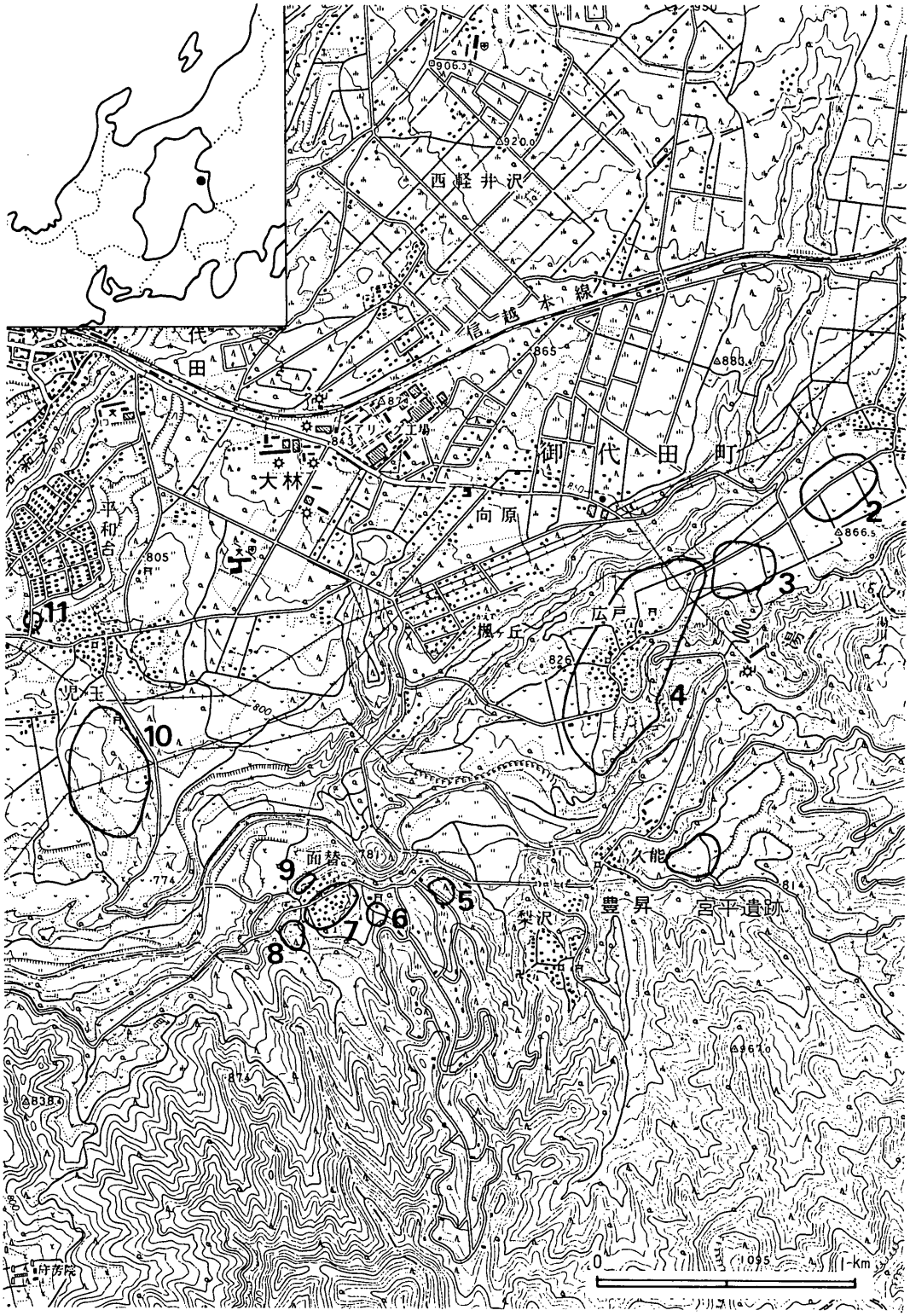
御代田町豊昇地区を西流する湯川は両岸を大きく浸食し，浅間山麓の火山灰土壌地帯特有といわれる「田切り地形」を形成している。その東岸には，湯川との比高50m・標高800mを測る平坦な台地が広がっている。この台地は，東方に位置する森泉山（1135m）山麓の末端にあたり，南北200m，東西100mの範囲に及んでいる。この台地一帯が宮平遺跡である。

宮平遺跡は，明治12（1879）年の伍賀村誌にも記載されているように，古くから出土遺物の豊富さで人々に知られていた。日本における旧石器文化の存在をいち早く説いていたN・G・マンローは，軽井沢滞在中の昭和5（1930）年に本遺跡を訪れている。翌昭和6（1931）年，北佐久郡下における考古学的調査が八幡一郎氏によって行なわれた際には，敷石遺構と多くの耳飾が発見された（八幡　1934)。そうした経緯もあって，昭和42（1967）年には，農業構造改善事業によって露呈した縄文時代後期の敷石住居址1軒を，上原邦一氏が調査している(上原　1968)。昭和53（1978）年には，農道舗装工事に先立っての確認調査が佐久考古学会員らの手によってなされている。

さて，宮平遺跡の周辺の遺跡を概観してみよう（第2図)。

まず最初にあげられるのは,同じく湯川水系で本遺跡の北東に位置する軽井沢町茂沢南石堂(もざわみなみいしどう)遺跡であろう。茂沢南石堂は8次にわたる調査がなされており（軽井沢町教育委員会　1968・1980・1981・1983)，数多くの遺構・遺物が検出されたが，わけても縄文時代中期後半から後期にかけての敷石住居址や石組み棺・土器等は，本遺跡との関連性において興味深い。茂沢よりやや下った湯川の西岸には，御代田町追分道添遺跡（1)，草越南畑遺跡（2)，追分西畑遺跡（3）と縄文時代中・後期を主体とする遺跡が続いている。草越南畑遺跡は昭和53（1978）年に佐久考古学会員らによって発掘調査されている（大井・他　1978)。湯川は宮平遺跡の眼下を過ぎると蛇行しながらも西流するが，豊昇を経て面替の部落に入ると，その南岸にふたたび縄文時代中・後期の遺跡の集中がみられる。小谷ヶ沢遺跡（6)，両替遺跡（7)，下屋敷遺跡（8)，北屋敷遺跡（9）がそれである。また，これらの遺跡群と湯川をはさんだ対岸には，縄文時代後期の住居址1軒が検出された池尻遺跡が存在している（10)。

以上に述べたように宮平を含む一帯にみられる数多くの遺跡より，八風山西北麓の湯川に臨む地帯は縄文時代中・後期の人々の主な生活の舞台であったと察せられる。またこれと対峙する浅間山南麓にも，この時代の人々の生活が展開していたようである。



第2図　宮平遺跡と周辺の遺跡分布　（1：25,000）

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
	宮平遺跡	御代田町大字豊昇字宮平・高畑		○	○	○			昭和57年度発掘調査
1	追分道添跡	〃　大字草越字追分道添		○					
2	草越南畑遺跡	〃　〃　字南畑		○					昭和53年度発掘調査
3	追分西畑遺跡	〃　〃　字西畑		○					
4	広戸城遺跡	〃　大字広戸字城の内					○	○	
5	清水平遺跡	〃　大字豊昇字清水平					○		
6	小谷ヶ沢遺跡	〃　大字面替字小谷ヶ沢		○					
7	面替遺跡	〃　〃　字東畑		○					
8	下屋敷遺跡	〃　〃　字下屋敷		○	○	○			
9	北屋敷遺跡	〃　大字豊昇字北屋敷		○					
10	池尻遺跡	〃　大字御代田字池尻		○					昭和53年度発掘調査
11	児玉遺跡	〃　〃　字児玉		○			○		
	小田井城跡	〃　〃　字城の内						○	
	野火付遺跡	〃　〃　字野火付					○	○	昭和59年度発掘調査
	鋳師屋遺跡	佐久市大字小田井字鋳師屋					○		〃
	原田遺跡	御代田町大字御代田字原田					○		

Ⅲ　層　　序

宮平遺跡における基本層序は第3図に示した。その内容は以下の通りである。

Ⅰ層　黒色土層　　耕作土。15～20cm前後の堆積をみせる表土。

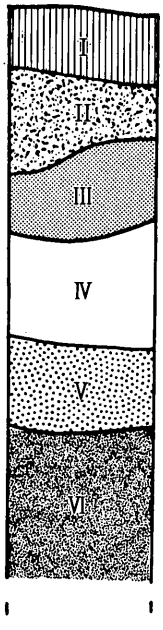
Ⅱ層　暗灰色土層　　粒子の粗い火山灰層。台地全体を覆っているものと思われるが，均等な堆積状況を示さず，厚い部分で50cm薄い部分で10cm前後を測る。本層は，浅間火山起源のテフラと考えられ，その年代が決定できれば当該地の重要な鍵層となろう。

Ⅲ層　黒色土層　　粒子の細かいやや粘性のある層。20～30cm前後の厚さを測るが，本層の堆積のみられない地点もある。径2～5cm前後の軽石を多量に含む。

Ⅳ層　黄褐色土層　　パミスを含む層。Ⅴ層より明るい。

Ⅴ層　茶褐色土層　　黄色土ブロックを多く含む。縄文時代の遺構の一部は本層より構築されていることが確認できる。

Ⅵ層　黄色土層　　地山であるローム層。遺構の確認面でもある。



第3図　層序式模図

なお，第3図の模式図はす－5グリットの杭付近の状況である。

Ⅳ 遺　　構

宮平遺跡において検出された遺構は，縄文時代中期後半から後期にかけての竪穴式住居址27軒（うち7軒は敷石住居址）・土壙46基・土壙墓1基・石組棺4基・礫群2基である。これらの遺構について，以下順を追って説明を加えてゆこう。

1　住居址

(1)　J－1号住居址（第5図，図版1）

J－1号住居址は，調査区の南端お－3グリッドを中心として検出された。そのプランの大半は調査区外である東側へ逃げてしまっている。住居址の形態は円形を呈するもので，壁際には周溝が巡っている。住居址内には，人頭大からそれ以上の大きさをもつ礫6個が配されていた。覆土は，Ⅰ層はプライマリーな自然堆積土であるが，1・2・3層は人為的な埋土と考えられる。遺物は，その中央部において（第5図1）ほぼ完形に復元可能な唐草文系の深鉢の破片1個体分が検出された。この土器は，中央高地縄文土器集成グループらによる唐草文系土器群のIII段階（長崎・他　1979）としてとらえられるものである。したがって本住居址の所産期は，縄文時代中期後半唐草文系III期（曽利III・IV式併行）併行と考えられよう。

(2)　J－2号住居址（第6図，図版2）

J－2号住居址は，か・き－3グリッドにかけて検出された。そのプランの大半は西側の調査区外に逃げているが，隅丸方形の住居であることが察せられる。住居の南半分は，D－9・10・11号土壙を破壊して構築されている。本住居址の東壁側の中央部には二個の礫が配され，ピットがみられた。

本住居址に切られているD－11からは，加曽利E式的な要素を色濃く残した唐草文系の深鉢1個体が出土しており，これは前述した唐草文系土期群のIII段階（曽利III・IV式期併行）としてとらえるものである（長崎・他　1979）。しかしなによりも本住居址からの出土遺物はほんの僅かで，縄文時代中期後半であることは理解できるものの，細かな段階をとらえられうるような土器は認められなかった。したがって本住居址の所産期は，縄文中期後半の曽利III・IV式併行期以降と大枠でとらえておこう。

(3) J－3号住居址（第7図，図版3・4・5）

J－3住居址は，き－4グリッドにかけて検出された。住居址の半分以上は東側の調査区外に逃げてしまっているが，円形のプランを呈するものと思われる。本住居址は現段階においてはP_1～P_6のピット6個を伴うが，P_6は規模から考えて貯蔵穴かとも考えられる。周溝は特に認められなかった。また，本住居址の壁の一部はD－12号土壙によって破壊されている。遺物は，本住居址の壁際から底部の切り取られた無文の浅鉢が床面に埋められていた状態で出土した（第7図1）。P_5からは，口縁部に渦巻つなぎ文のみられる加曽利E式の深鉢が出土している。曽利系の土器破片もみられるようである。

本住居址の所産期は，P_5より出土した深鉢より，神奈川考古同人らの編年による第III加曽利E期（神奈川考古同人会　1978・1980）に併行するものとしてとらえられよう。

(4) J－4号住居址（第8図）

J－4号住居址の検出された，く・け・こ・さ－4・5グリッド付近は，縄文時代中期後半の住居5軒が著しく重複する地点で，その前後関係の把握に非常な困難を用した。この地区において重複する住居址は，J－4・J－5・J－6・J－7・J－8のそれぞれである。これらについて，セクションやプラン確認等によって判断された切り合い関係より，住居址の新旧関係は古いものより順に，$\left.\begin{matrix}J-4\\J-8\end{matrix}\right\rangle\!\!\rightarrow$ J－7→J－6→J－5となる。また，その南側はJ－3にも切られている。したがって，本住居址はJ－8と並んで，これらの住居址の中で最も古いものということになる。ただし，本住居址とJ－8との新旧関係は不明である。J－4のプランは，そうした激しい切り合いのため，僅かにその南壁のプランと，ピットが6個（P_1～P_6）が検出されたにすぎなった。

本住居址においては，共伴遺物の抽出が困難であるため，その所産期については確定できないが，本住居址を切るJ－7及びJ－3が，神奈川考古同人らによる第III加曽利E期（神奈川考古同人　1978・1980）併行と考えられることから，本住居址の所産は縄文中期後半でもこれらに先行するものと考えられる。なお，本住居址からは，曽利II式に比定できる土器片も出土しており，曽利II式併行期に位置付けられる可能性も残る。

いずれにしても，詳細な時期決定については遺物を検討した後にゆずりたい。

(5) J－5号住居址（第9図，図版6）

J－5号住居址址は，J－4の項で示したように，(古)$\left.\begin{matrix}J-4\\J-8\end{matrix}\right\rangle\!\!\rightarrow$ J－7→J－6→J－5(新)という新旧関係の中で把握されるもので，これらの中では最も新しい住居址と考えられる。その床

面も，Ｊ－４，Ｊ－８の床面より20cm前後上に設けられている。本住居址のプランは明確にはとられ難かったが，円形あるいは楕円形のプランを想定できようか。本住居址に付随するピットは，一応P_1～P_7としたが，特にP_2～P_7の確認面はＪ－５の床面より下のローム層面であり，本住居址に伴うものであるかどうか明確でない。本住居址からは，その西壁付近と考えられる場所より埋甕が検出された。この埋甕は，下半部の切断された加曽利Ｅ式の深鉢で，倒置され石蓋がなさていた。埋甕の上面と，本住居址の床面のレベルは一致し，他にこのレベル床面をもつ住居址が存在しないため，この埋甕は本住居址に伴うものとしてとらえてよいものと考えられる。

本住居址の所産期は，埋甕より第III加曽利Ｅ期（神奈川考古同人会　1978・1980）併行と考えられる。ちなみに，本住居址に先行するＪ－６号住居址は曽利IV式期（第III加曽利Ｅ期併行）併行，Ｊ－５・Ｊ－６に先行するＪ－７もまた第III加曽利Ｅ期併行と考えられるものであり，Ｊ－５・Ｊ－６・Ｊ－７の出土資料は，当該土器群の細かな変遷を追ううえで重要となろう。

(6)　Ｊ－６号住居址（図版７）

Ｊ－６号住居址は，Ｊ－５・Ｊ－７・Ｊ－８と絡んで存在すると考えられる住居址であるが，そのプランを把握することはでき得なかった。その存在は，Ｊ－７の上層にみられるローム層の貼り床と，その貼り床とほぼ同じレベルにみられた埋甕より想定した。

本住居址の所産期は，埋甕が曽利IV式（長崎・他　1979）に位置付けられる曽利系の土器であるため，曽利IV式期併行と考えられよう。

(7)　Ｊ－７号住居址（第10図，図版８・９）

Ｊ－７号住居址は，(古)$\begin{matrix}J-4\\J-8\end{matrix}$＞→Ｊ－７→Ｊ－６→Ｊ－５(新)の新旧関係の中でとらえられるものである。そのプランは，隅丸方形あるいは楕円形を呈するものと考えられ，長軸は6.7m前後を測るものと思われる。本住居址の壁をめぐって一部には周溝が認められる。ピットは，床面において確認できたものを一応図示したが，本住居址に付随するものがどうか明らかでない。なお，本住居址の西北コーナーは突出しており，焼土が確かめられたが，本住居址に伴わない土壙が存在していた可能性も残る。また，南壁の一部はＤ－14によって破壊されていたものと思われる。遺物は，底部の切り取られた加曽利Ｅ式の深鉢が埋甕として（第10図１），また，加曽利Ｅ式の深鉢の破片がピット付近より検出された（同図２）。

本住居址の所産期は，埋甕となった深鉢より第III加曽利Ｅ期（神奈川考古同人会　1978・1980）併行と考えられよう。

(8)　J－8号住居址（第11図，図版10）

J－8号住居址は，く・け・こ・さ－4・5グリット付近にみられるJ－4～J－8号住居址の中で，J－4と並んで古いものである。そのプランの大半は調査区外の南側へ延びているが，おおよそ楕円形をとるものと考えられる。本住居址の壁は，すでにJ－7によって確壊されてしまっているが，住居址をほぼ全周すると思われる周溝が残存していた。また，炉は，住居址の北半の中央部より検出された。この炉は，ほぼ円形のプランを呈する堀り込みで，かつては石組みを伴っていたことがその堀り方によって理解できる。この炉の石囲いは，J－7が構築される際に取り外され廃棄されたものと思われる。炉の一部はJ－5のピットによっても破壊されている。炉の覆土中には炭化材と焼土がみられた。

本住居址は，共伴遺物の抽出が困難で，その所産期については縄文時代中期後半としてしかいい得ない。しかし，少なくとも本住居址を切るJ－7の時間（第III加曽利E期併行）より先行するものとしてとらえることができよう。

(9)　J－9号住居址（第12図，図版11）

J－9号住居址は，し－6グリッドにかけて検出された敷石住居址である。平面プランは径3m程度の円形を呈すると考えられるもので，その一部は未調査区である東側へ逃れるものの，敷石は住居前面になされているものと考えられる。住居の中心より若干はずれたところに方形を呈する石囲い炉が存在し（第12図1），壁際には埋甕がなれている（同図2）。壁外には，本住居址に不随すると考えられるピットがいくつか認められる。

敷石に用いられている鉄平石（輝石安山岩）の原産地としては，東部町祢津・蓼科畳石・佐久町板石山等があげられる(白倉盛男氏の御教示による)。本住居址に敷かれている鉄平石の大きさは，長軸が50～70cm前後のもので均一性がうかがえる。おそらくその大きさについては，石材入手の段階で選択がなされ，その後不都合な場合は分割されたのであろう。

本住居址の炉は，2個の鉄平石に囲われているものであるが，当初は石材で四方を囲われた炉であったのかもしれない。炉のセクションにおいては，II層に焼土がみられ，III層には灰の堆積がみられた。いずれも若干の骨片を含んでいるものであった。

埋甕は，住居の南の壁際に存在するが，本遺跡の他の埋甕とは異なり底部もしくは胴下半部の切断されていないものであった。キャリパー形をとる深鉢形土器で，沈線によって区画された磨消縄文帯が器面全体を覆う，縄文時代中期最終末に位置付けられる加曽利E式土器である。

本住居址の所産期は，埋甕より第IV加曽利E期（神奈川考古同人会　1978・1980）併行と考えられる。

(10) J－10号住居址

J－10号住居址は，J－9号住居址の北側す－6グリッドに存在したと考えられるものである。プランはまったく確認できず，僅かな貼り床よりその存在を想定した。

伴出した遺物も僅かなためその所産期は確定できないが，おそらく第III加曽利E期（神奈川考古同人会　1978･1980）併行ととらえられようか。

(11) J－11号住居址（第13図，図版12・13）

J－11号住居址は，せ－7グリッドにおいて確認された敷石を伴う住居址である。ピット3個と敷石の一部が確認されたにすぎず，その範囲も線引きできなかった。敷石には，他の住居址と同様に鉄平石が用いられている。

共伴する遺物が明確でないためその所産期は判断し難いが，敷石という性格をふまえたうえで僅かな出土遺物より類推すると，縄文時代中期後半でもより後の段階に位置付けられる可能性も残ろう。

(12) J－12号住居址（第14・15図，図版14・15・16・17）

J－12号住居址は，ち－7グリッドにかけて検出された敷石住居址である。鉄平石の敷きつめられた住居の半分が検出されたが，そのプランとしてはa・bの二者が考えられる。炉は住居址の中心よりやや西に設けられており，周囲を4つの石で囲ったもので，後に甕の底部が埋められている。炉の内径は，長辺42cm・短辺35cm，炉の上面から埋甕の底面までは約20cmを測る。炉のセクションを観察すると，焼土がみられるのは埋甕より下位のII層である。したがってこの甕は炉の機能が停止した後に埋められたものと考えられる。

本住居址の所産期は，炉内より検出された土器により，縄文時代後期堀之内式併行期と考えられよう。

(13) J－13号住居址（第16図，図版18）

J－13号住居址は，に－7グリッドより検出された敷石住居址である。鉄平石の敷かれたもので，そのプランの半分は調査区外に逃げるが，円形を呈する住居址であると考えられる。本住居址に付随すると考えられるピットはP_1～P_7である。

本住居址よりは，石棒（第16図1）・石皿（同図2）が検出された。共伴する土器については検討を経た後の抽出が必要となろう。

本住居址は，現段階では共伴する土器が明らかでなく所産期は決定し難いが，縄文時代後期堀之内式併行期ととらえて大過なかろう。

(14)　J－14号住居址（第17図，図版19）

J－14号住居址は，の・は－7・8グリッドにかけて検出された住居址である。確認できたのは，住居の北西の壁際の一部分で，鉄平石による若干の敷石もみられる。壁に沿っては周溝とピットがみられる。P_1・P_2は，本住居址に伴うものかどうか判然としないが，伴なうとすれば貯蔵穴等の機能が考えられようか。また，本住居址の一部には，D－22号土壙がかかるが，両者の新旧関係は明らかでない。

本住居址からは，縄文時代中期後半の土器が出土しているが，本遺構に共伴するものかどうかは明らかでない。本住居址が一部に敷石を伴なうという事実を考え合わせると，本住居址の所産期は縄文時代中期終末から後期初頭にかけてと考えるのが妥当であろう。

(15)　J－15号住居址（第18図，図版20・21・22）

J－15号住居址は，ふ－7・8グリッドにかけて検出された。検出時には住居址の範囲には礫が散在しており，また，鉄平石の敷石も認められたため，敷石住居であることが判断された。そのプランは判然としないが，北側に周溝を伴うプランの一部が確認され，また住居址の壁に沿うと考えられるピットの配列性から，円形あるいは楕円形のプランが想定できた。なお，本住居址はその南側において，D－23号土壙と重複するが，両者の前後関係は明らかでない。また，P_1は，本址に伴うピット（貯蔵穴等）として認識したが，あるいは別の遺構である可能性も考えられる。本址において炉は検出されなかった。

遺物は，第18図1の位置より，縄文時代後期堀之内Ⅰ式に比定できる深鉢の完形が，床面に埋められた状態で検出された。この土器の内面は，剝落が激しく，何らかの貯蔵等を思わせた。

さて，本住居址の所産期は，前述した深鉢より縄文時代後期堀之内Ⅰ式併行期と考えられる。

(16)　J－16号住居址（第19図，図版23・24）

J－16号住居址は，ほ－8グリッドにおいてそのコーナーの一部が確認されたのみで，その大半は調査区外である東側へ延びている。住居のプランはあるいは隅丸方形をとるのかもしれない。本住居址の壁をめぐっては6個のピットが検出された。また，鉄平石が検出されているため，敷石住居址である可能性も残る。

さて，本住居址より検出された遺物は僅かで，しかも共伴遺物の抽出が困難であるため，その所産期は確定できない。しかし，他の住居址等から類推して，その所産期は縄文時代中期終末から後期初頭に位置付けることが妥当かと考えられる。

(17)　J－17号住居址（第20図，図版25・26・27・28）

J－17号住居址は，ま－9グリッドにかけて検出されたもので，後述するJ－18号住居址を破壊して構築されており，その一部においては鉄平石の敷石を伴う。住居址の平面プランは，その壁に沿うと考えられるピットの配列性より，円形もしくは楕円形と考えられるが，その半分は調査区外である西側へ逃れてしまっている。本址の中心部よりは，方形の炉が確認された。この炉は，その二辺が偏平な石材によって囲われたもので，炉内の覆土II層には焼土の堆積がみられた。

遺物は，第20図1の位置より把手付広口壺が埋められた状態で検出された。この把手付広口壺は加曽利E系の土器で，神奈川編年でいう第IV加曽利E期（神奈川考古同人会　1978・1980）に位置付けられるものである。したがって本住居址の所産期も，ほぼこの時期に併行するものとみて差しつかえあるまい。

(18)　J－18号住居址（第21図，図版29・30）

J－18号住居址は，み－9グリッドにかけて検出された。その大部分は，H－17号住居址の構築時に破壊されており，僅かに北壁の一部が残っていたにすぎない。また本住居址に伴う炉の下部がH－17号住居址の床面下に残っていた。本址に伴うと考えられるピットは，P_1～P_6であるが，このうちP_1～P_4は住居の壁に沿って配置されているものと考えられる。また，P_4からは周溝も若干延びている。

遺物は，第21図1の位置より深鉢の底部が検出されたが，総じて本住居址に共伴すると考えられるものは僅かであった。

その所産期については，漠然と縄文時代中期後半としか言いようがないが，少なくとも本址を切るJ－17号住居址の所産期（第IV加曽利E期併行）より前出するものとしてとらえられることは確かであろう。

(19)　J－19号住居址（第22図，図版33）

J－19号住居址は，む－12グリッドにおいて僅かにそのコーナーが検出されたにすぎない。そのプランは，コーナーより察すると隅丸方形を呈するものかと考えられる。伴出遺物がないためその所産期は確定できないが，おそらく縄文時代中・後期に属するものではあろう。

(20)　J－20号住居址（第22図，図版31）

J－20号住居址は，み・む－12・13グリッドにかけて存在すると考えられる住居址である。その近辺にはJ－20と重複してD－36～D－40号土壙が存在しており，したがってJ－20のプランを性格につかむことはできなかった。なお，その付近に存在するピットのいくつかは本住居址に付

随するものと考えられる。本住居址とD－36～D－40号土壙の新旧関係については把握できなかった。

本住居址の所産期は，僅かな出土遺物より縄文時代中期後半と考えられる。

(21) J－21号住居址（第22図，図版32）

J－21号住居址は，み・む－14グリッドにかけて存在すると考えられるもので，壁に沿うと考えられる柱穴の配列性より，そのプランを想定することができた。本住居址は，J－22号住居址と重複するが，両者の新旧関係は明らかでない。

本住居址は，出土遺物は比較的多いが，共伴遺物の抽出が困難であり，詳細な時期決定は遺物検討後に譲るとして，縄文中期終末から後期の所産と考えておこう。

(22) J－22号住居址（第23図，図版34）

J－22号住居址は，み・む－14グリッドにおいて，J－21号住居址と重複して検出された。前述したように，J－21とJ－22の新旧関係は明らかでない。本住居址は，北壁付近の一部が検出されたにすぎず，大半は調査区外である南側へ逃がれるが，そのプランはおおよそ隅丸方形を呈するものであることが理解できる。

さて，本住居址より検出された遺物はごく僅かであるが，本住居址が縄文時代中期後半の所産であることを物語っている。

(23) J－23号住居址（第24図，図版35）

J－23号住居址は，み－18グリッドにかけて検出されたもので，その上部はJ－24号住居址構築に破壊されている。本住居址はその半分が南側の調査区外に逃がれるが，残った部分よりほぼ円形を呈する住居であることが察せられる。住居址の壁際には周溝やピットも認められるが，炉は検出できなかった。おそらく調査区外に存在するのであろう。

J－23に共伴する遺物は，現段階では抽出できず，したがってその所産期も確定し難いが，縄文時代中期後半から後期にかけてのものとみて大過なかろう。

(24) J－24号住居址（第25・26図，図版36・37）

J－24号住居址は，み－19グリッドにかけて検出されたもので，J－23を破壊して構築されていた。本住居址において確認されたのは，東壁と炉で，西壁やピット等を検出することはできなかった。炉は，7つの河原石（安山岩）により丸く囲われたもので，その内法は30cm×20cm前後を測る。炉の覆土においては炭化物粒子や炭化材がみられた。

本住居址より出土した遺物は，縄文時代中期後半に属するものである。したがってその所産期も縄文中期後半と考えられるが，より詳細な時期については遺物の検討を経た後にふれたい。

(25) J－25号住居址（第27図，図版38・39）

J－25号住居址は，み－20グリッドにおいて検出された。住居址の約半分が検出されたのみで，その半分は調査区外である北側に逃がれるが，円形のプランを呈するものであることが理解でき，他と比べて小形であることがいえる。炉は，住居中央において検出された。河原石と角礫が四方に配された石囲い炉であるが，その東辺の角礫は炉内に崩落していた。炉の覆土中には，若干のカーボンと焼土がみられた。住居の床面はフラットな状態を呈し堅く締まっていた。住居址内には鉄平石が若干みられた。なお本住居址に付随すると考えられるピットは検出されなかった。

本住居址より検出された遺物は僅かな数であるが，縄文時代中期加曽利E系，曽利系に比定できるものがみられる。より詳細な時期については遺物の検討を経た後にふれたい。

(26) J－26号住居址（第28図，図版40・41）

J－26号住居址は，み－22グリッドにおいて検出された。遺構は，東壁及び西壁の一部と炉が検出されたにすぎないが，J－25と同様小形円形の住居址であることが推察された。炉は，河原石による石囲い炉で，内法は25cm×15cm程度となっている。

遺物は，縄文時代中期後半の土器片が僅かに3片検出されたにすぎないが，この時期を本住居址の所産期とみて大過あるまい。

(27) J－27号住居址（第29図）

J－27号住居址は，む－15グリッドにおいて僅かにそのコーナーと周溝の一部が検出されたにすぎない。コーナーより察すると，その形態は隅丸方形をとるものかと考えられる。

本住居址に共伴する遺物はなく，したがって所産期も不明と言わざるを得ない。

2　土壙

(1) D－1～D－5号土壙（第30図，図版42・43・44）

D－1号土壙からD－5号土壙は，あ・い・う－1・2グリッドより検出された。

D－1は，方形に近い円形を呈するもので，その断面は偏平な台形状を呈する。出土遺物は，縄文時代中期後半の土器片30点前後で，所産期もほぼその頃とみてよいであろう。

D－2は，不整円形を呈する土壙で，その一部はD－3と重複するが，両者の新旧関係は明らかでない。出土遺物はほとんどなく，所産期も不明である。

D－3は，北側においてD－2と接し，南側は調査区外へ延びるが，そのプランはほぼ楕円形を呈するものと考えられる。遺物は，縄文時代中期後半と考えられる土器片が数多くみられるため，ほぼその頃の遺構と考えられよう。

D－4は，ほぼ円形を呈する土壙で，その断面は偏平な台形状を呈している。一部は，D－5と接するが，両者の新旧関係は不明である。遺物は認められなかった。

D－5は，D－4に接して検出された円形を呈する土壙である。出土遺物には，縄文時代中期後半加曽利E式と，後期堀之内式の二者がみられ，いずれが本土壙に共伴するのかはわからない。なお，堀り方より，D－4とD－5の接点にもう一基土壙が存在する可能性がある。

(2) D－6・D－7・D－8号土壙（第31図）

D－6・D－7・D－8号土壙は，う・え－2・3グリッドにかけて検出された。

D－6は，径1m前後のほぼ円形を呈し，断面は偏平なカマボコ状を呈する土壙である。縄文時代中期の土器片が数点出土している以外遺物はみられない。所産期不明。

D－7は，円形を呈すると考えられるもので，D－8と重複するが，両者の新旧関係はとらえられなかった。断面は浅いすり鉢状を呈する。出土遺物はなく，所産期不明。

D－8は，角のとれた方形を呈する土壙で，ピット1個を伴う。出土遺物はみられない。

(3) D－9・D－10・D－11号土壙（第32図，図版45・46）

D－9・D－10・D－11号土壙は，か－3グリッドにおいて重複して検出された。三者の新旧関係は，古い順から$\left.\begin{matrix}D-9\\D-11\end{matrix}\right\rangle\!\!\rightarrow$D－10となり，さらに近接するJ－2号住居址は，D－10よりも新しいものと考えられる。

D－9は，J－2とJ－10に破壊され，その一部を失なっているが，その形態は不整楕円形をとるものと考えられる。土壙内には，鉄平石がみられた他，縄文時代中期後半と考えられる土器片が検出されたが，本遺構に伴うものかどうか明らかでない。

D－10は，D－9及びD－11を切るもので，ピットを1個を伴う。

D－11は，その一部はD－10に破壊され一方は調査区外へと逃がれるもので，断面は台形状を呈する。D－11内からは，加曽利E式の様素を強く残した唐草文系の深鉢1個体分の破片が検出され，おおよそ復原された。この深鉢は本土壙内に埋められていたものと考えられる。なお，この深鉢は，中部高地縄文土器集成グループらの分類に基づけば，唐草文系土器群のIII段階（曽利III・IV式期併行）としてとらえられるものである（長崎・他　1979）。したがって本土壙の所産

期もそれに併行すると考えてよいであろう。

(4) D－12・D－13・D－14号土壙（図版47）

D－12号土壙は，く－4グリッドにかけて検出されたもので，その半分は調査区外へ逃がれるが，プランはほぼ円形を呈するものと考えられる。

D－13は，欠番。

D－14号土壙は，け－5グリッドにかけて検出された上面に礫を伴う円形の土壙である。D－14は，J－7（第III加曽利E期併行）を破壊して構築され，J－5（第III加曽利E期併行）に切られている。J－7・J－5ともに第III加曽利E期併行の住居址で，それらの間に位置する本土壙もまた第III加曽利E期併行と考えられよう。

(5) D－15・D－16号土壙（第33図，図版48・49）

D－15号土壙は，し－6グリッドにおいて検出された。楕円形を呈すると考えられるプランの約半分が検出されたが，その上部には礫がみられた。断面は，角のとれた⊐状を呈する。出土遺物は，加曽利E系・曽利系の土器片が数多くみられ，したがってその所産期も縄文時代中期後半と考えられる。

D－16号土壙は，し－5グリッドにおいて円形あるいは楕円形を呈すると考えられるプランの半分が検出された。その断面はカマボコ状を呈し，一部にはテラスをもつものであった。出土遺物は，加曽利Eの土器片が数点みられたにすぎず，所産期は不明。

(6) D－22・D－23・D－24号土壙（第34図，図版50・51図）

D－22号土壙は，の－7グリッドにおいて検出された。角のとれた方形プランを呈し，その断面形は浅いすり鉢状を呈するものと考えられる。なお，本土壙はJ－14号住居址（縄文中期終末～後期初頭）のピットに切られており，したがって所産期もそれ以前と考えられる。

D－23号土壙は，ひ・ふ－7グリッドにおいて検出された土壙で，J－15号住居址と重複するが，両者の新旧関係は明らかでない。そのプランは半分が検出されたにすぎないが不整方形を呈し，断面は浅いすり鉢状を呈する。その上部には鉄平石がみられたが，これはJ－15にかかわる敷石の一部であろう。遺物は，縄文時代中期後半と後期初頭の土器片が数多く検出されており，所産期もほぼその頃と考えられる。

D－24号土壙は，ふ－8グリッド，J－15号住居址内において検出された土壙である。J－15との切り合い関係は不明確で，あるいはJ－15の貯蔵穴である可能性も残る。形態は，ほぼ円形を呈し，断面は下場までストンと落ちた状態を呈している。本土壙の上部には礫数点がみられる

が，これはＪ－15に伴なうものなのかもしれない。

(7)　Ｄ－25・Ｄ－26・Ｄ－27号土壙（第35図，図版52）

Ｄ－25・Ｄ－26・Ｄ－27号土壙は，み－９・10グリッドにかけて検出された。

いずれも不整形を呈する土壙で，１個ないし２個の柱穴を伴なっており，一連のものとも推察される。出土遺物はまったくみられず，所産期は明らかでない。

(8)　Ｄ－28～Ｄ－40号土壙（第36図，図版53・54）

Ｄ－28～Ｄ－40号土壙は，み・む－11・12・13グリッドにかけて集中する。

Ｄ－28～Ｄ－33は，円形あるいは楕円形を呈する小形のもので，断面はカマボコ状あるいは浅いすり鉢状を呈するものがほとんどと言える。これらは，土壙というよりピットと呼称するほうがふさわしいかもしれない。

Ｄ－34・Ｄ－35は，径１ｍ前後を測る不整円形の土壙で，その断面はカマボコ状を呈する。Ｄ－34からは，縄文時代中期後半に位置付けられる土器片が多量に出土しており，所産期もほぼその頃とみて大過なかろう。

Ｄ－36は，不整楕円形を呈するもので，断面はすり鉢状を呈する。遺物は，縄文時代中期後半の土器片が数点みられるにすぎない。

Ｄ－37は，ほぼ円形のプランを有する土壙で，断面は台形状を呈する。土壙内には礫がみられ，縄文時代中期後半の土器片が検出された。

Ｄ－38は，径１ｍ前後の円形のプランをもつ土壙で，断面はカマボコ状を呈する。出土遺物には，縄文時代中期後半の土器片がみられ，所産期もほぼその頃と考えられる。

Ｄ－39は，径70cm前後の円形プランを呈する土壙で，断面はカマボコ状となっている。覆土中には若干のカーボンが認められた。遺物は検出されなかった。

Ｄ－40は，長軸80cm・短軸60cmを測る楕円形の土壙で，その断面はカマボコ状を呈する。本土壙の上面には焼土が認められたが，本址に伴なうものかどうかは不明である。遺物は検出されなかった。

なお，Ｄ－36～Ｄ－40は，Ｊ－20号住居址と重複するが，両者の新旧関係は不明である。

(9)　Ｄ－41号土壙（第37図，図版56・57）

Ｄ－41号土壙は，む－13グリッドにおいて検出された。そのプランの一部は調査区外に逃がれるが，径70cmを測る円形をとり，断面形は下ぶくれの袋状を呈し，深さ60cmを測る。本土壙内からは，礫とともに深鉢１個体が検出された。この深鉢は，口辺部に隆帯がめぐらされている以外

は無文で，下部のややすぼまる円筒状を呈するものである。これは，型式的には，縄文時代後期堀之内Ⅰ式に比定されるもので，したがって本土壙の所産もその時期とみてよいであろう。

(10) D－42号土壙（第37図，図版55）

D－42号土壙は，む－17グリッドにおいてそのプランの半分が確認された。断面はカマボコ状を呈し，深さ約90cmを測るものである。覆土は，7層によって形成されるが，その中には焼土の堆積もみられた。遺物は，縄文時代中期後半の土器が多量に出土しているため，その所産期も当該期と考えられるが，遺物の検討によってさらに詳しい時期が判明するものと思われる。

(11) D－43～D－46号土壙（第38図，図版58）

D－43～D－46号土壙は，み－18グリッドにかけて検出された。

D－43号土壙は，不整形の土壙でその断面は台形状を呈するものである。一部がD－44と重複するが，両者の新旧関係は不明である。出土遺物はなく，所産期不明。

D－44は，D－43と重複する土壙で，そのプランは不整円形をとり断面は盤状を呈するものである。出土遺物はみられず，所産期不明。

D－45号土壙は，D－46号土壙を切って存在するもので，そのプランの一部が検出されたにすぎない。上部には，礫2点がみられ，遺物は縄文中期後半の土器片2点が検出された。

D－46号土壙は，D－45に切られる土壙であるが，そのプランの一部検出にとどまった。出土遺物からその所産期は，縄文時代中期後半と考えられよう。

(12) D－47号土壙（第38図）

D－47号土壙は，み－19グリッドにおいて検出された。そのプランはほぼ円形で，断面は半円状を呈する。出土遺物はなく，所産期不明。

3 炉を伴う土壙

(1) D－48号土壙（第39図，図版59・60）

D－48号土壙は，ま－22グリッドにおいて検出された。本址は石囲い炉を伴い，規模的にも隣接するJ－26号住居址とほぼ同等程度であるが，そのプランはあまり整わず，床面と考えられるフラットな面も一部のみで他は凸凹の激しいものであった。したがってこれを，日常の居住を伴う「住居址」とは考えず，土壙として把握することにした。

D－48は，ハート形の崩れたようなプランを呈するもので，その北半分には三日月状にフラットな面がみられ，南半分は凸凹が激しくなっている。炉は北半分のフラットな面において構築されたもので，河原石２個と鉄平石２個によって方形に囲われている。炉の覆土においては，焼土・炭化物等は認められなかった。

本址は，出土遺物により縄文時代中期後半に位置付けられるが，詳しい時期については言及できない。

4　灰及び骨片を伴う土壙

(1)　D－50号土壙（第40図，図版61・62）

D－50号土壙は，さ－５グリッドにおいて検出された。そのプランは，長軸1.7m短軸1.3mを測る楕円形をとり，断面形は深さ20cm前後を測る盤状を呈している。覆土は２層によって形成されるが，ことに第２層は埋土と考えられる。第１層は，黒褐色土層で炭化物･灰を含む層である。この１層中からは大量の骨片が検出された(図版61)。第２層は灰層で，多量の炭化物を含む層である。その上部には骨片の分布がみられた。このようなセクションの状況から推察すると，本土壙においては，まず灰が大量に廃棄され，つづいて骨および骨片が廃棄されたものと考えられる。

本土壙及び後述するD－52号土壙から検出された骨は，一部には焼けているものもみられたが，そのほとんどは被熱していないものである。これらの骨はすべて獣骨であろうと推測され，宮崎重雄氏の同定によるとその中には，シカ・イノシシ・クマ・カエル等の骨がみられるそうである。

以上を勘案すると，本址の性格が“ゴミ捨て場”であったことが理解できる。灰は炉の使用等に伴なって廃棄されたものであり，獣骨はその肉が食された後の残物であろう。本址より検出された骨の個々をより細かく同定すれば，当該期における動物性食料摂取の実態がより明確なものとなってくると思われる。

さて，本土壙からは石鏃（第40図１）の他，縄文時代後期に位置付けられる土器片が検出された。これは堀之内式に比定できるものである。したがって本遺構の所産期もまた堀之内期併行と考えられよう。なお，後述するD－52も本土壙と同様な性格をもつものであり，その出土遺物が双方とも堀之内式に該当するものであることからも，両者は共存していたものと考えられる。

(2)　D－52号土壙（第41図，図版63・64・65）

D－52号土壙は，し－５グリッドにおいて検出された。そのプランは楕円形を呈するものと思われるが，約半分が調査区外へ逃がれてしまっていた。断面形は，総体的には深さ60cm前後を測

る逆台形状を呈し，底面においてはピット２個が認められた。

Ｄ－52の覆土は７層から成り立っている。第１層は灰層である。第２層は，灰はみられないが骨片を含む層である。第３層は骨片を多量に含む層で，第４層は骨片を含み灰をごく少量伴なう層である。５層は灰を多量に含む層で，６層は灰層，７層は不明である。また，遺物は覆土全体に及んで分布するが，特に第４層に集中する傾向がうかがえる。骨は，第２層から５層にかけて分布するが，特に３層・４層に集中するようである。このセクションより，本遺構の覆土の堆積の経緯を追ってみると，まず７層が埋められた後，灰である６層・５層が埋められ，４層の埋土とともに土器片と骨片が廃棄される。３層にあっては骨が主となり，２層においても廃棄された骨がみられる。１層はふたたび灰の廃棄によって形成されていることがとらえられる。

本址にみられる骨も，Ｄ－50と同様獣骨で，その肉が食された後廃棄されたものであろう。その種類については今後詳細な同定が必要となる。

さて，本址から検出された遺物には，多量の土器片と共に，土偶の胸部（第41図１）・磨製石斧（２）・打製石斧（３）がみられた。また５層直上において無文の無頸壺が検出され（第41図４，図版63），ほぼ完形に復原された。これは，おそらく破損のため廃棄されたのであろう。

さて，本遺構は多量に検出された土器片と無頸壺等により，縄文時代後期堀之内式併行と考えられよう。そして，その性格の近縁性より，本土壙とＤ－50とは共存関係にあったものとしてとらえることができる。

5　土壙墓

(1)　Ｄ－19号土壙墓（第42図，図版66・67）

Ｄ－19号土壙墓は，て－８グリッドにおいて検出された。プランは角のとれた方形を呈するものと考えられるが，その半分は調査区外へ逃がれてしまっている。また，その南側は，Ｄ－49に切られている。南北の断面をみると，北側にテラスをもつ「凵」状となっていて，その深さは50cm前後を測る。このテラスには，鉄平石１個が置かれその上に深鉢が伏された状態で出土した（図版67）。深鉢の中には骨片がみられた。この骨片は未同定であるが，このような出土状況を考えると，この骨が埋葬された人骨であろうことが推測される。しかし，深さ16cm最大径21cmを測るこの深鉢においては，とうてい人骨は納めきれず，ましてや人体の一部も納まるものではない。したがって，本址は洗骨の一部を納めた再葬墓と考えられよう。なお骨は，鉢内にみられるのみで，土壙の覆土からは検出されなかった。また，本址に伴う副葬品等は検出されなかった。

さて，本土壙から検出された深鉢は，朝顔形の形態をとる薄手のもので，口辺部および胴部に

は条痕がみられる土器である。形式的には，縄文時代後期加曽利ＢII式に比定され得るものである。したがって本再葬墓の時期もまた，加曽利ＢII併行期ととらえられよう。

6　石組み棺

(1)　D－17・D－18・D－20・D－21号石組み棺（第43・44図，図版68・69・70）

D－17は，つ－７グリッドにおいてそのコーナーが検出された。森泉山産と考えられる偏平な石材（安原石とも呼ばれる。敷石住居の敷石とは異なり，やや厚手で角がとれている。）を，連立したもので，調査区外において一周する方形の石囲いとなるものと思われる。その底面においては敷石は認められなかった。なお，遺物はみられなかった。

D－18号石組み棺は，D－17の北側において検出された。D－17と同様方形の石囲いになるものと思われるが，その東部は調査区外へ逃がれていた。石列は，その南辺においては若干乱れていた。底面における敷石等はみられず，遺物は認められなかった。

D－20号石組み棺は，D－18の東北側に位置するものであるが，他の三者のように密な石組みとはなっていない。あるいは後世においてその石材の一部が抜き取られた可能性も残る。出土遺物は認められなかった。

D－21号石組み棺は，前三者とは若干距離をおいたな－７グリッドにおいて検出された。石組み棺のコーナーの一部が検出されたのみで，その大半は調査区外である西側へ逃がれていた。本址においては石列は二重に巡らされていたものと考えられる。本石囲い内からは，磨石１点と凹石１点が検出された。

さて，今回の宮平遺跡の調査によって，４基の石組み棺が確認された訳であるが，これらは隣接して存在すること，主軸方向がほぼ北を指し一致すること，同様な構造をもつこと等により，同一時期の所産と考えられる。しかし，その所産期を示す遺物を検出することはできなかった。ところで，本遺跡のある湯川水系の上流に位置する軽井沢町茂沢南石堂遺跡からは，本例の同様の石組み棺が検出されている（第１地点配石遺構域１号遺構）。この石組み棺は本例と比べると整然としたもので，その所産期は棺内に伏せられた深鉢の型式より縄文時代後期加曽利Ｂ式期に比定されるようである。本遺跡における石組み棺もこのような例から類推して，縄文時代後期の所産とみて大過あるまい。

7 礫 群

(1) R－1号礫群（第45図，図版71）

R－1号礫群は，つ・て－7・8グリッドより検出された礫の集中分布である。礫は，隣接する森泉山にみられる安山岩のようである。

礫群内には，石皿（第45図1）・多凹石（同図2）がみられた他，翡翠の垂飾等が検出された。石皿・凹石は別として，垂飾は本礫群に伴うものかどうか不明である。

ところで，本礫群と軌を一にして，石組み棺D－17・D－18・D－20が存在しており，これらが本礫群と同様森泉山起原の石材を用いていることを考えると，両者は無関係ではないように思われる。

したがって，本礫群は三基の石組み棺に付随するものと考えることができる。その所期も，縄文時代後期として位置付けられようか。

(2) R－2号礫群（第46図，図版72）

R－2号礫群は，な－7・8グリッドより検出された。その礫は，R－1と同様森泉山起原の安山岩である。

礫群内からは，凹石（第46図1）・磨石（同図2・3）が検出された。

本礫群は，R－1と同様石組み棺D－21と重複して存在しており，これに付随するものとしてとらえることができよう。所産期は，縄文時代後期と考えられようか。

引用参考文献

御代田町教育委員会　1983　『宮平』（発掘調査概報）

林幸彦　1982　「宮平遺跡」　（『長野県史』１－２）

前原豊・川島雅人　1975　「北佐久群御代田町宮平遺跡の後期縄文式土器」　（『信濃』III・F27－4）

前原豊　1978　「豊昇宮平遺跡」　（『佐久考古』４）

上原邦一　1968　「宮平遺跡」　（『佐久教育』３）

八幡一郎　1934　『北佐久郡の考古学的調査』

群馬県企業局　1980　『三原田遺跡』住居編

神奈川考古同人会　1980・1981　「縄文時代中期後半の諸問題」　（『神奈川考古』10・F11）

佐久市教育委員会　1983　『中村遺跡』

上野佳也　1983　『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』

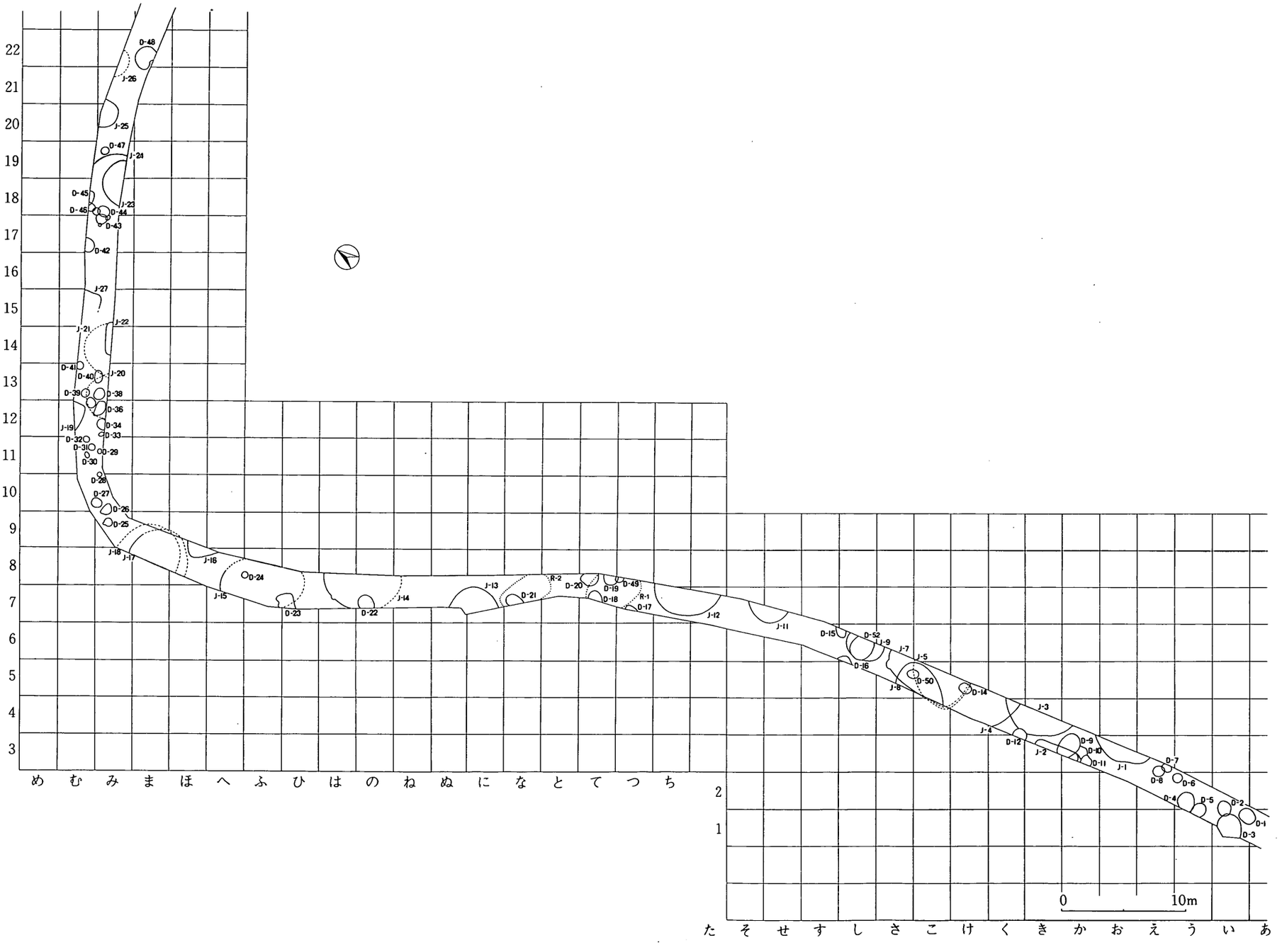
千曲川水系古代文化研究所　1980　『編　年』

赤山容三　1982　「竪穴住居」　（『縄文文化の研究』８）

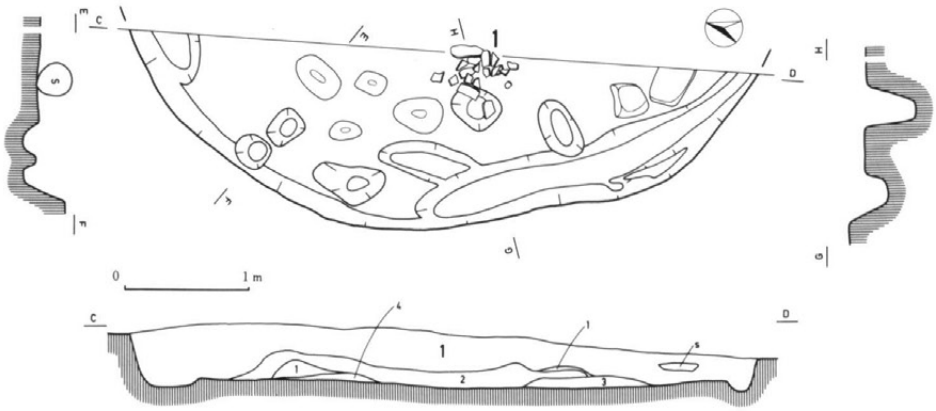
山本暉久　1982　「敷石住居」　（『縄文文化の研究』８）

長野県考古学会　1978　『下吹上』

中部高地縄文土器集成グループ　1979　『中部高地縄文土器集成』



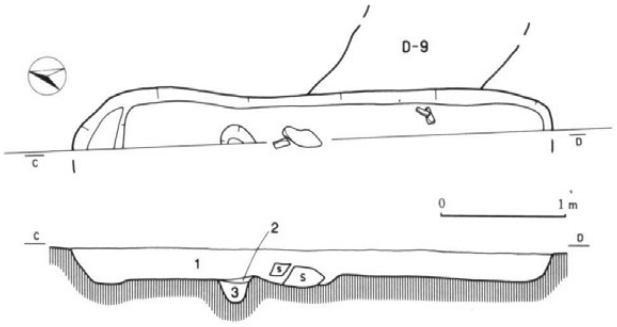
第4図　宮平遺跡検出遺構全体図（1：400）



1　黒褐色土層　パミスを含む
1．黒褐色土層　炭火物を含む
2．暗黄褐褐色層　ローム粒子を多量に含み、やや焼けている、しまりなく粘性なし。
3．黒褐色土層
4．黒色土層

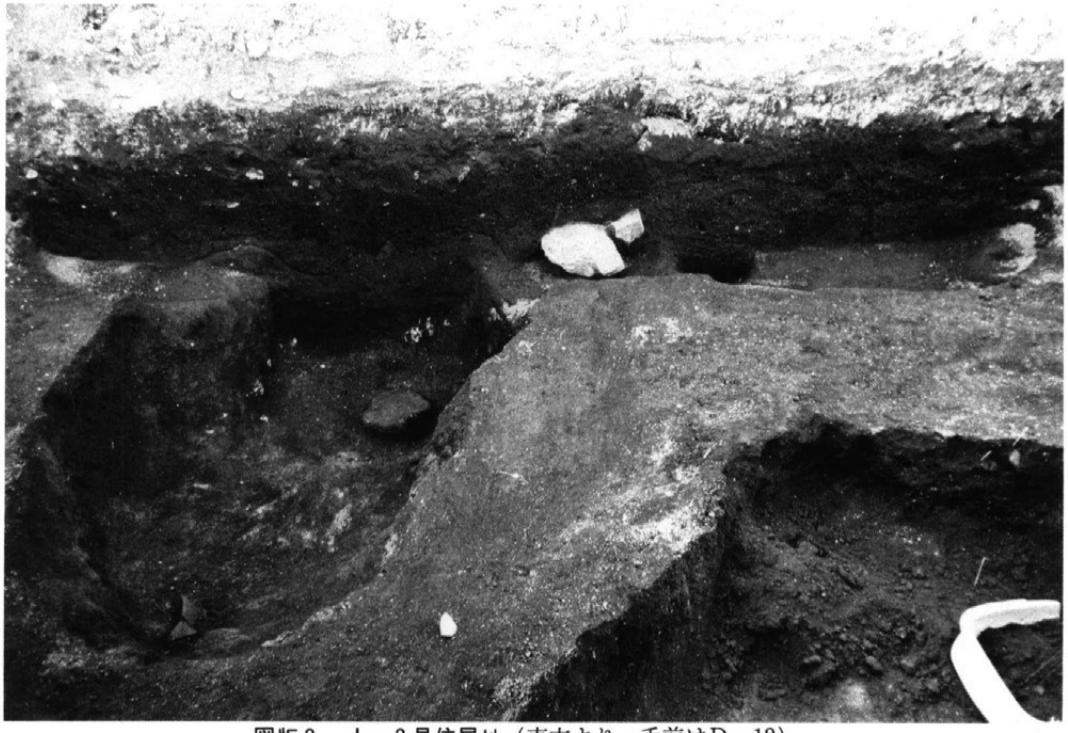
第5図　J－1号住居址実測図（1：60）

図版1　J－1号住居址（南方より）

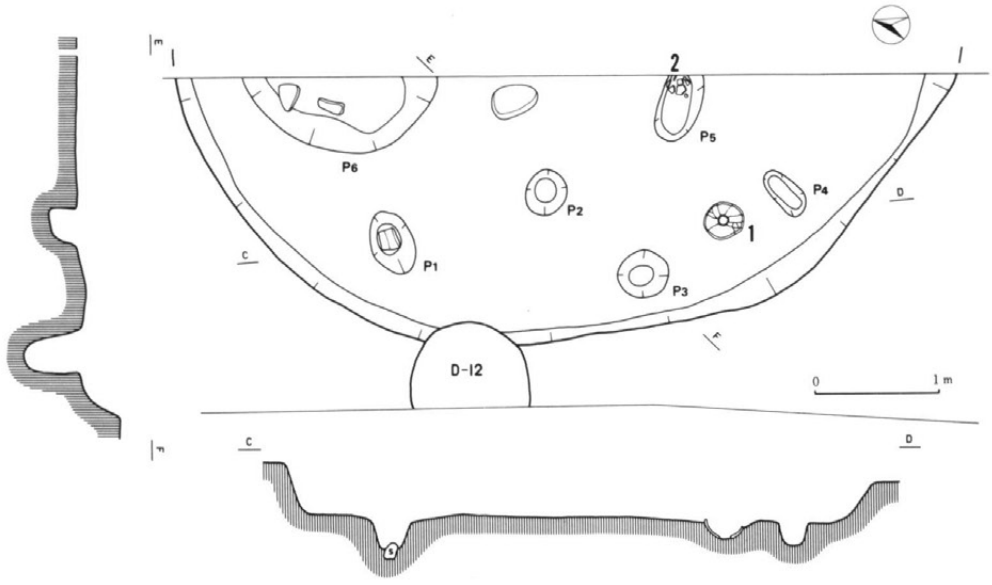


1．黒褐色土層　パミス、カーボンを若干含む
2．暗黄褐色土層　ローム粒子を多く含む
3．暗褐色土層

第6図　J－2号住居址実測図（1：60）



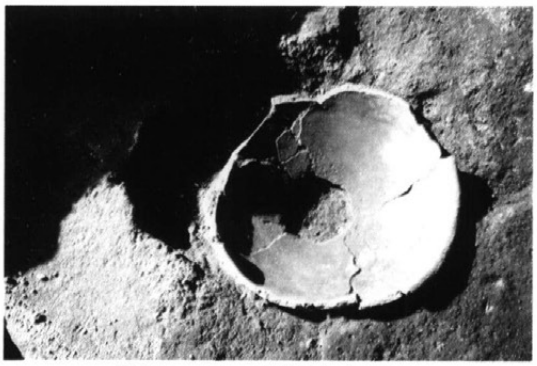
図版2　J－2号住居址（東方より・手前はD－12）



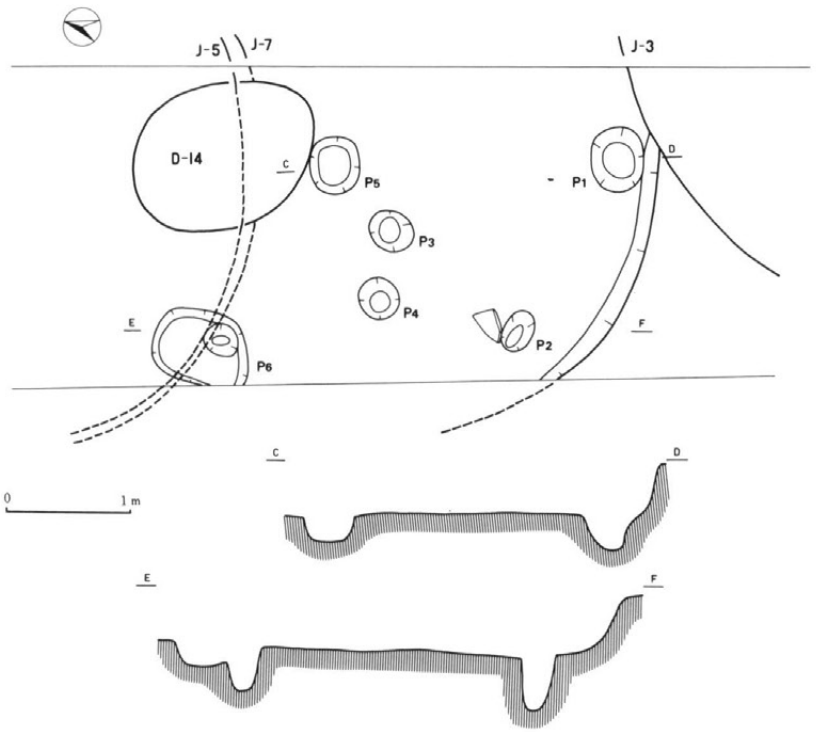
第7図　J－3号住居址実測図（1：60）

図版3　J－3号住居址（西方より）

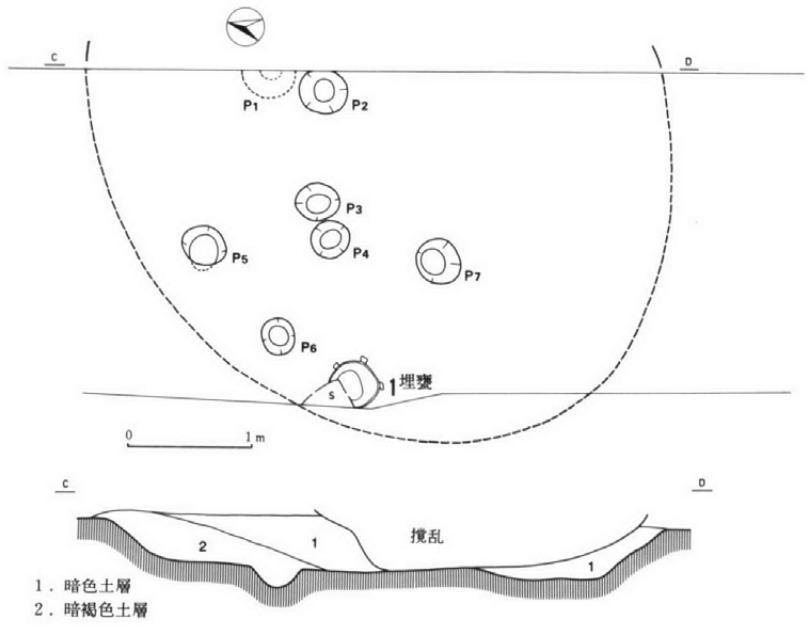
図版４　Ｊ－３号住居址（北西より）



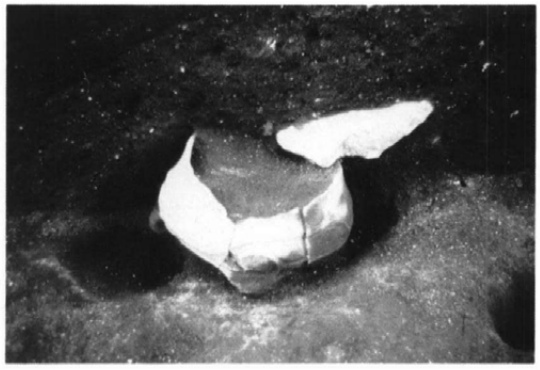
図版５　Ｊ－３浅鉢出土状態



第８図　Ｊ－４号住居址実測図（１：60）

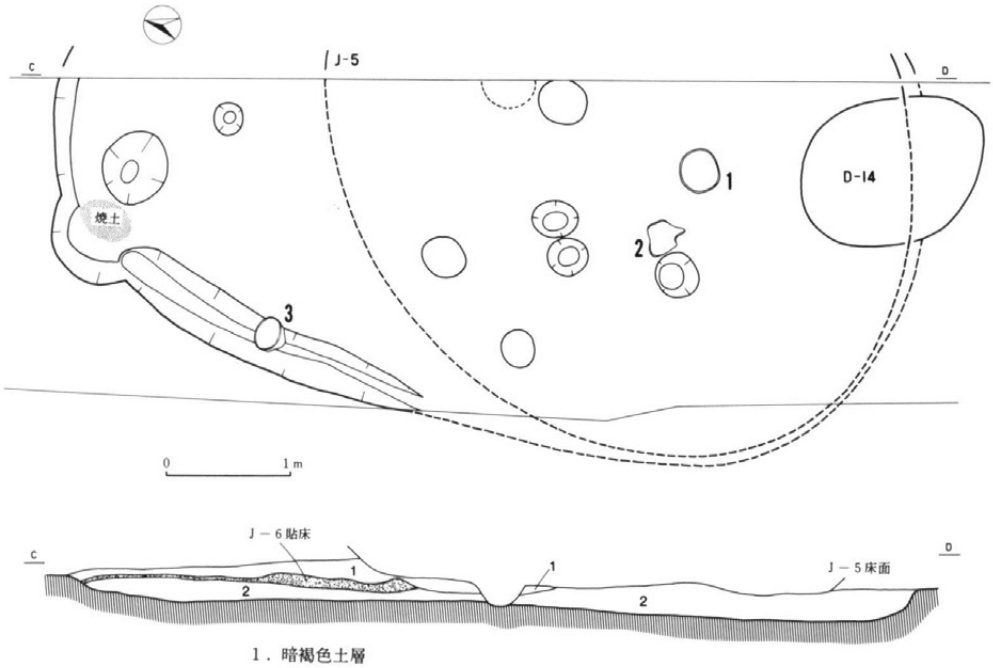


第９図　Ｊ－５号住居址実測図（１：60）



図版６　Ｊ－５埋甕出土状態

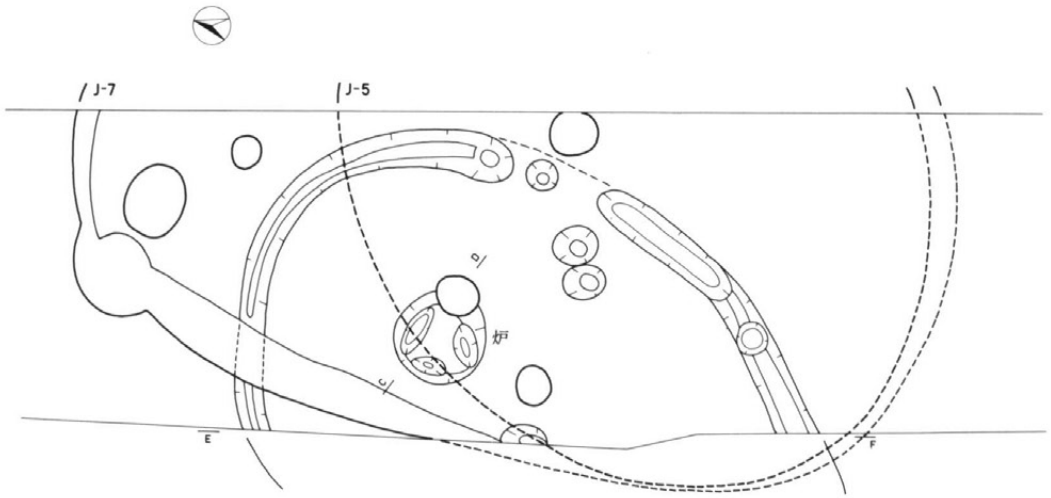
図版７　Ｊ－６埋甕出土状態



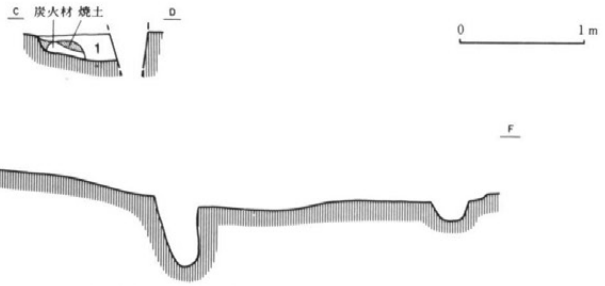
第10図　J－7号住居址実測図（1：60）

図版8　J－7号住居址（西方より）

図版9　J－7遺物出土状態

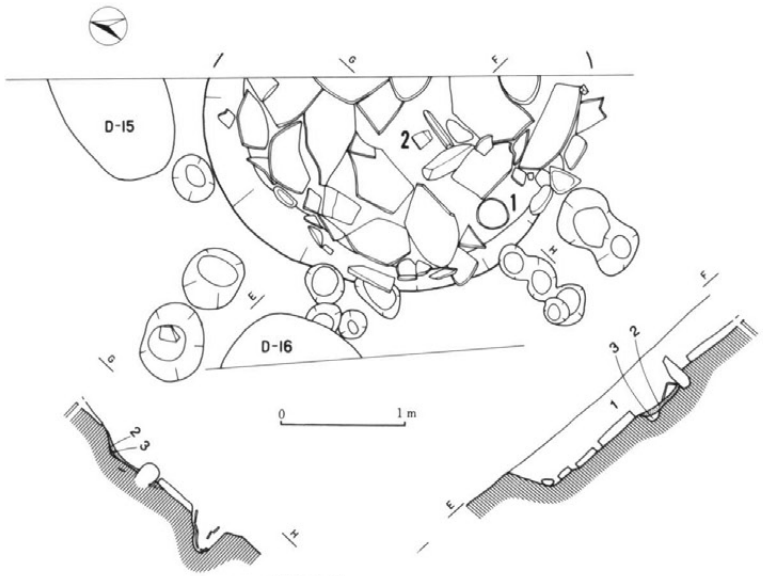


1．暗褐色土層
　カーボンを含む。



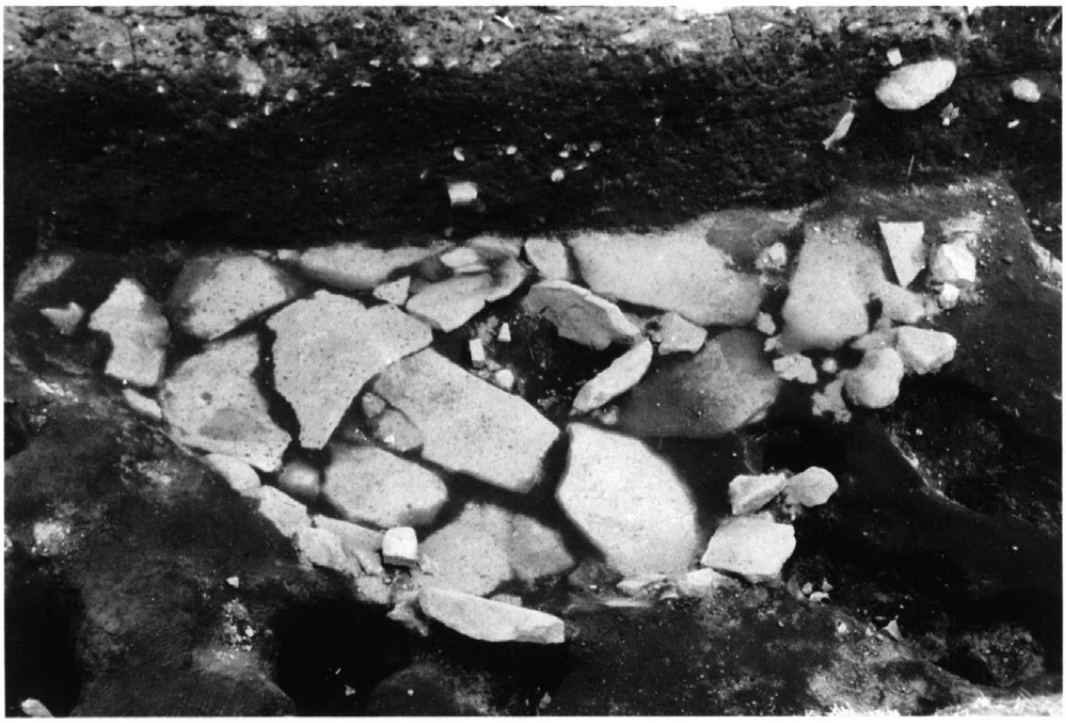
第11図　Ｊ－８号住居址実測図（１：60）

図版10　Ｊ－８号住居址（西方より）

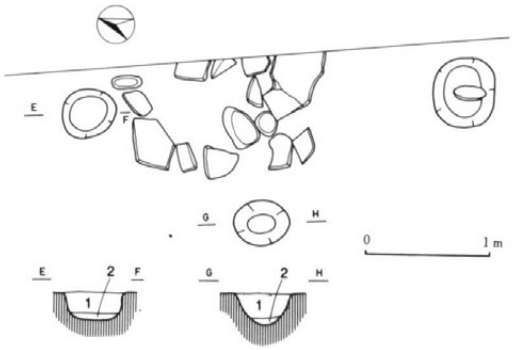


1．暗褐色土層
2．赤褐色土層（焼土層）　しまりなく骨片を含む。
3．灰色土層（灰層）　骨片を含む。

第12図　J－9号住居址実測図（1：60）



図版11　J－9号住居址（西方より）

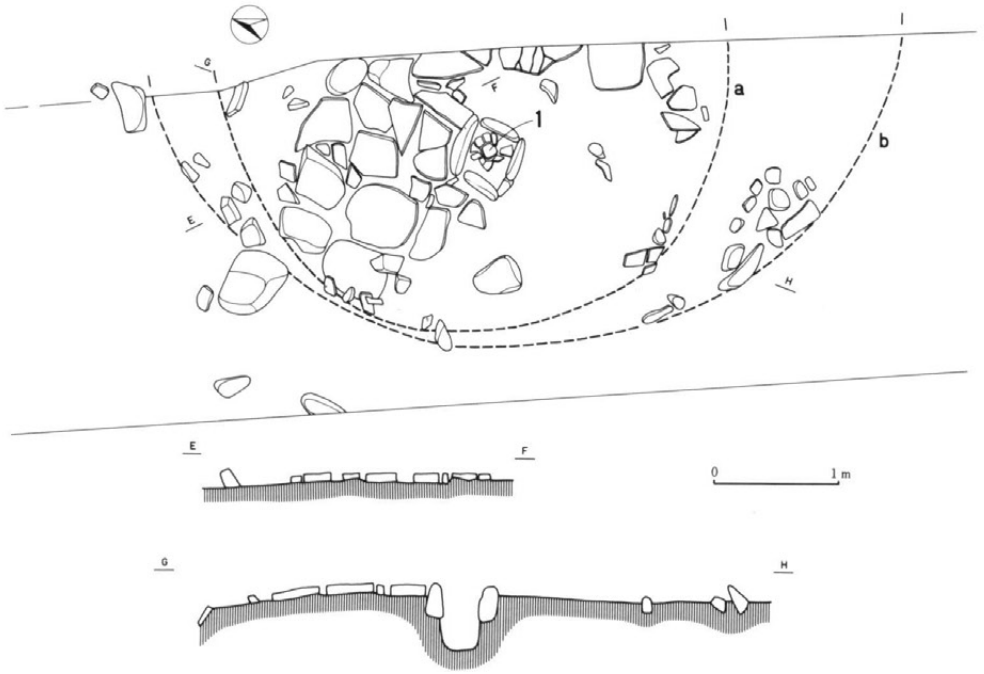


1．暗色土層
2．黒色土層　カーボンを含む、ややしまりあり。

第13図　J－11号住居址実測図（1：60）

図版12　J－11号住居址（北方より）

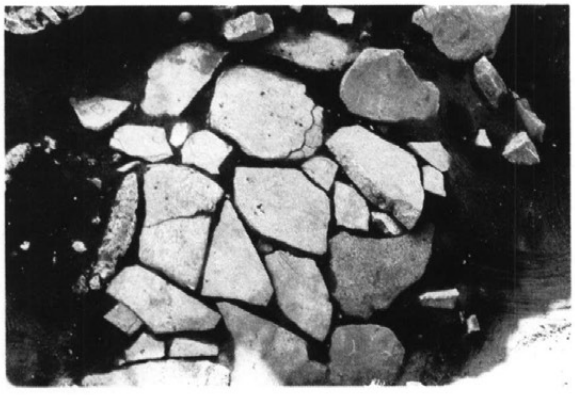
図版13　J－11号住居址（西北より）



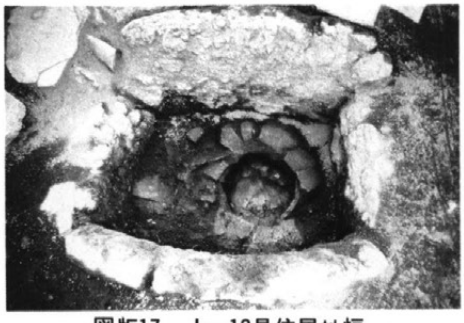
第14図　J－12号住居址実測図（1：60）

図版14　J－12号住居址（南方より）

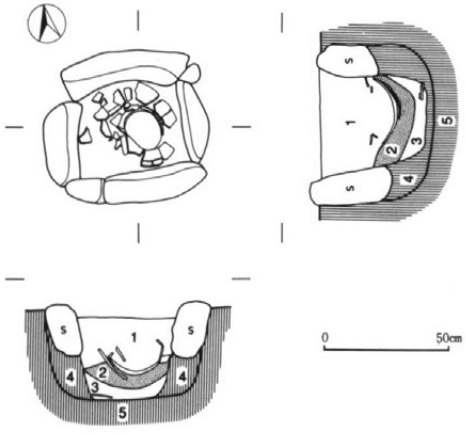
図版15　J－12号住居址（東方より）



図版16　J－12号住居址敷石

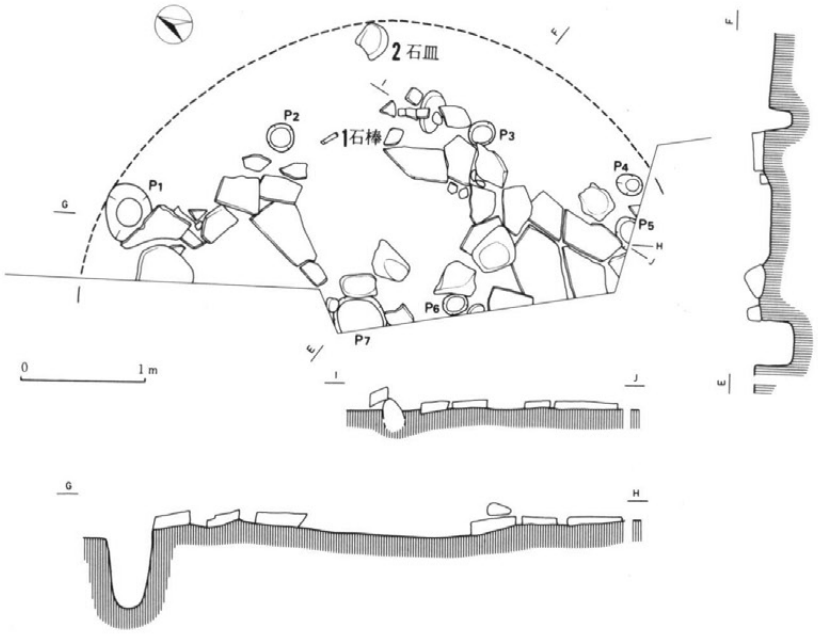


図版17　J－12号住居址炉



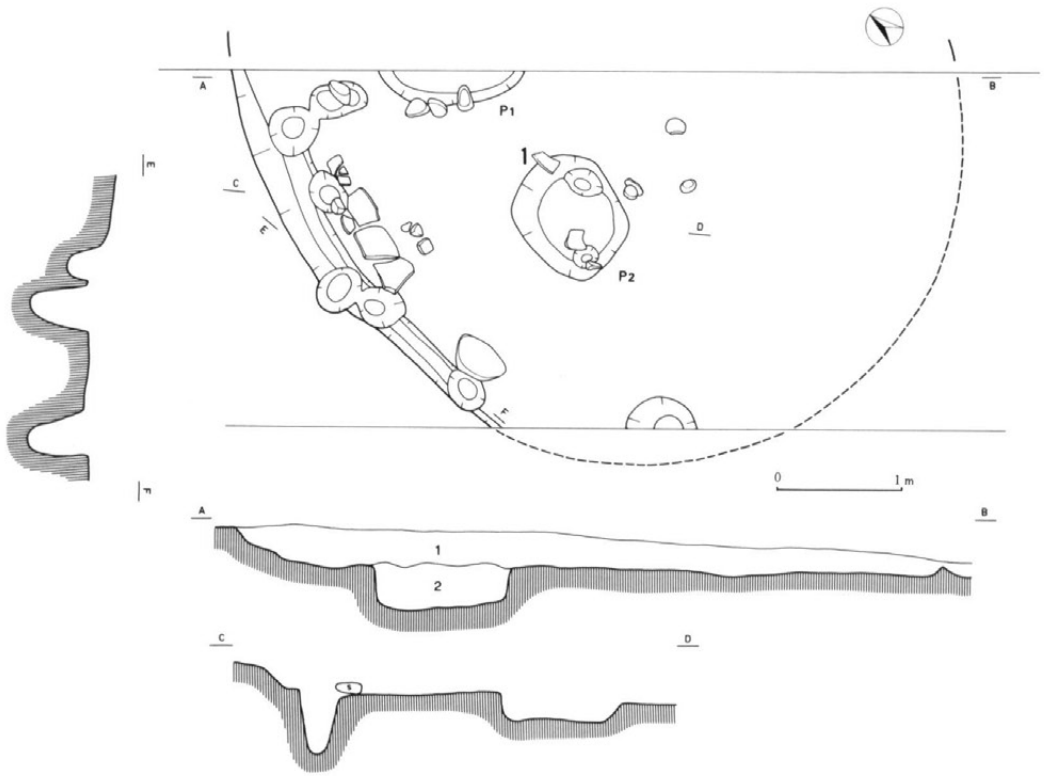
1．黒色土層
2．赤褐色土層（焼土層）
3．黒褐色土層
4．黒色土層
5．ローム層（地山）

第15図 J－12号住居址炉実測図（1：30）



第16図　J－13号住居址実測図（1：60）

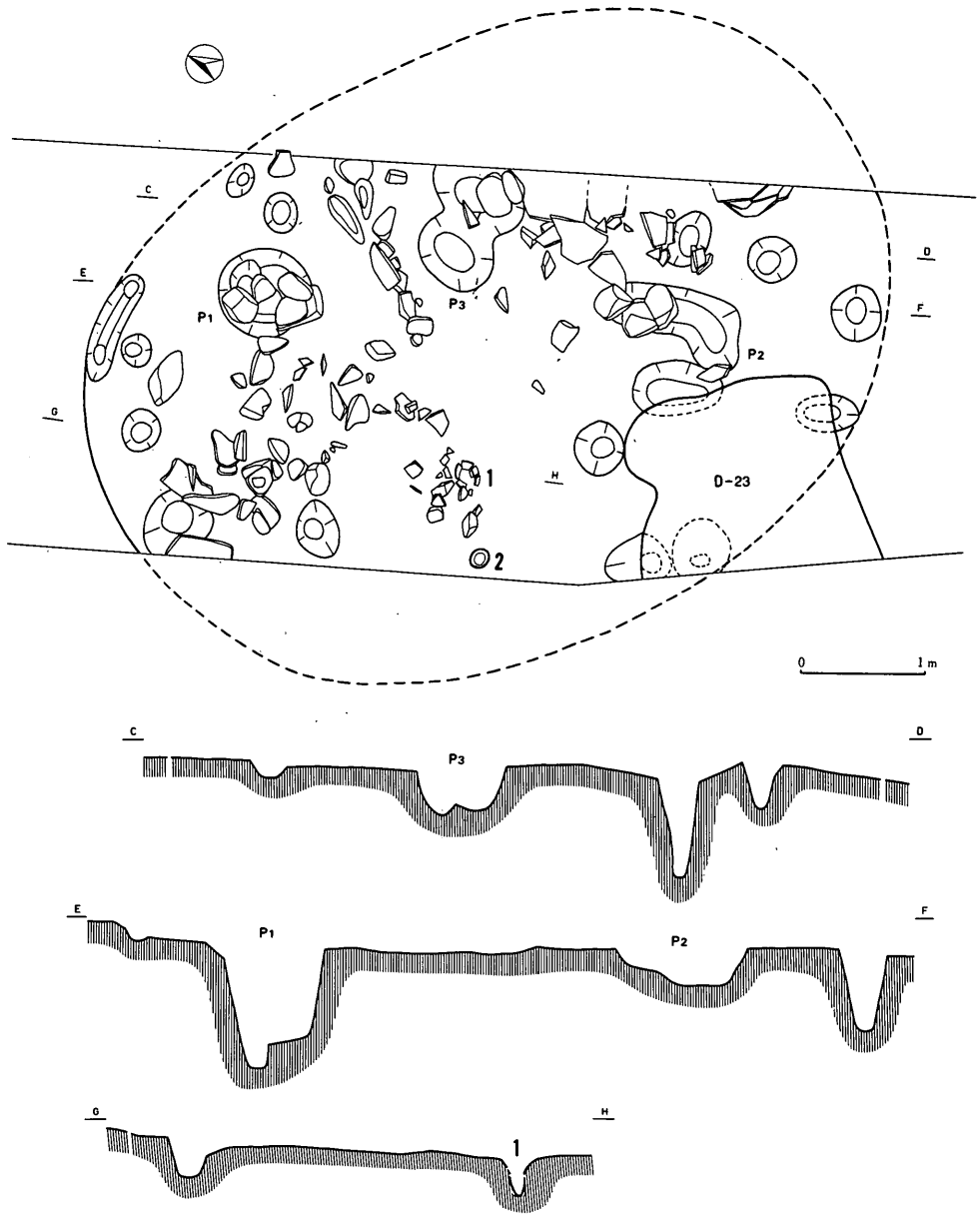
図版18　J－13号住居址（東方より）



1．黒褐色土層　直径1cm～6cm大のパミスを多く含む、粘性多少あり。
2．茶褐色土層　直径1cm～6cm大のパミスを多少含む、炭火物混。

第17図　J－14号住居址実測図（1：60）

図版19
J－14号住居址
（北方より）

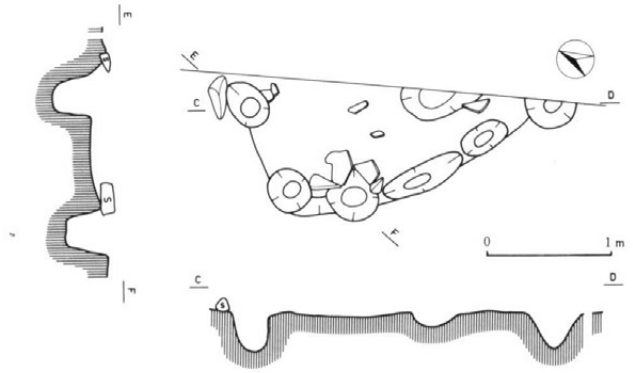


第18図　J－15号住居址実測図（1：60）

図版20　J－15号住居址（北方より・調査中の状態）

図版21　J－15号住居址埋甕

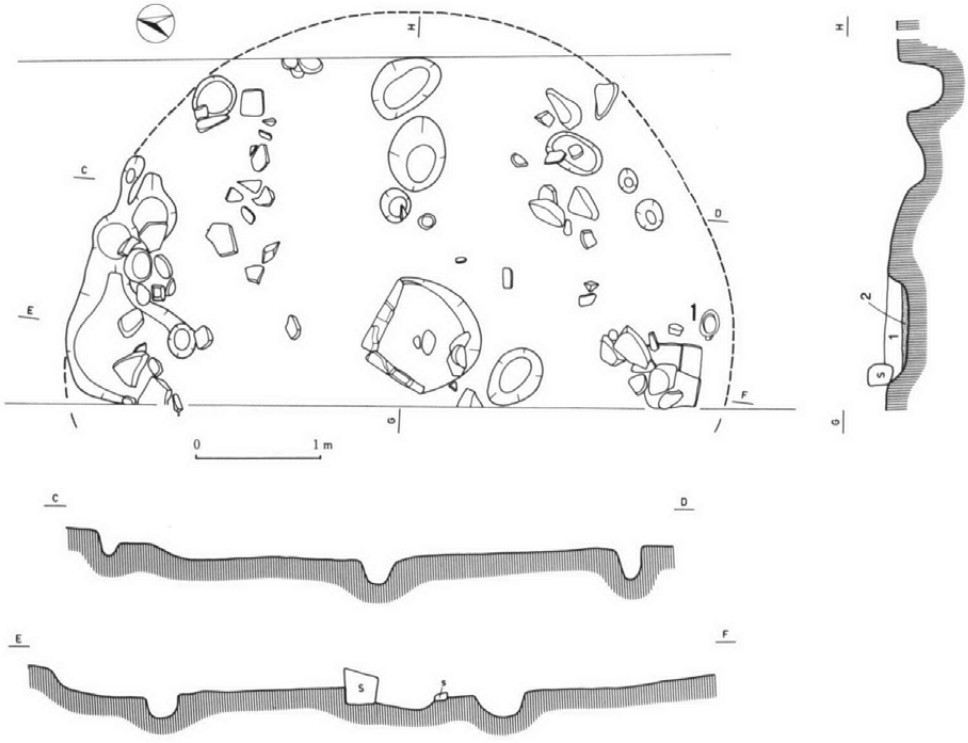
図版22　J－15号住居址埋甕



第19図　J－16号住居址実測図（1：60）

図版23　J－16号住居址（北西より）

図版24　調査風景



1．茶褐色土層　ローム粒子多量混、炭火物・焼土粒子微量混。
2．赤褐色土層　（焼土層）

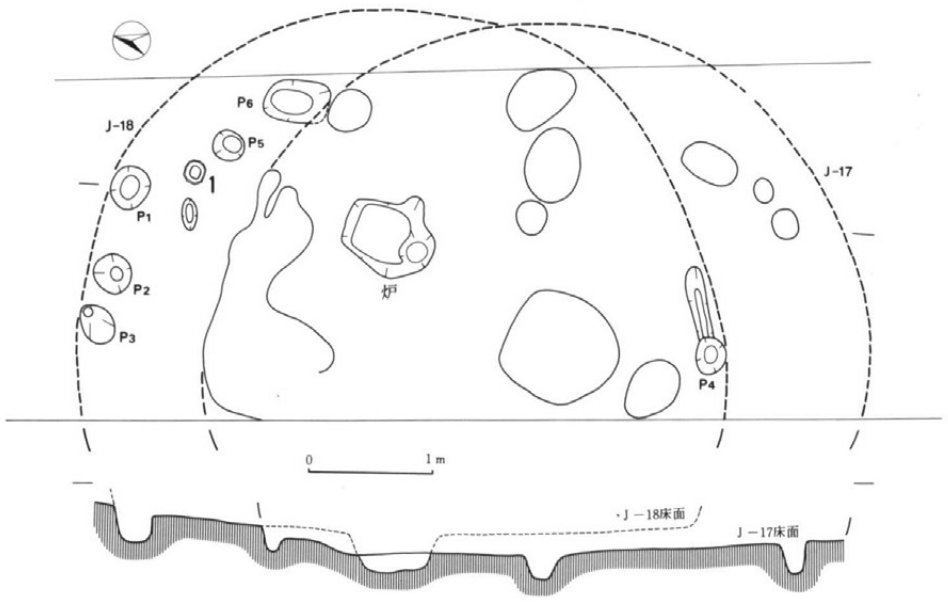
第20図　J－17号住居址実測図（1：60）

図版25　J－17号住居址（南方より）

図版26　J一17号住居址敷石と埋壺

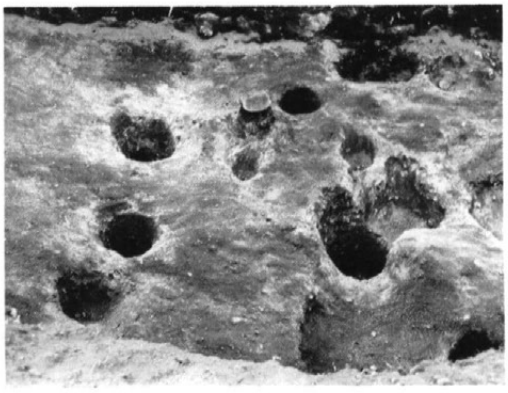
図版27　J－17号住居址 埋壺

図版28　J一17号住居址炉

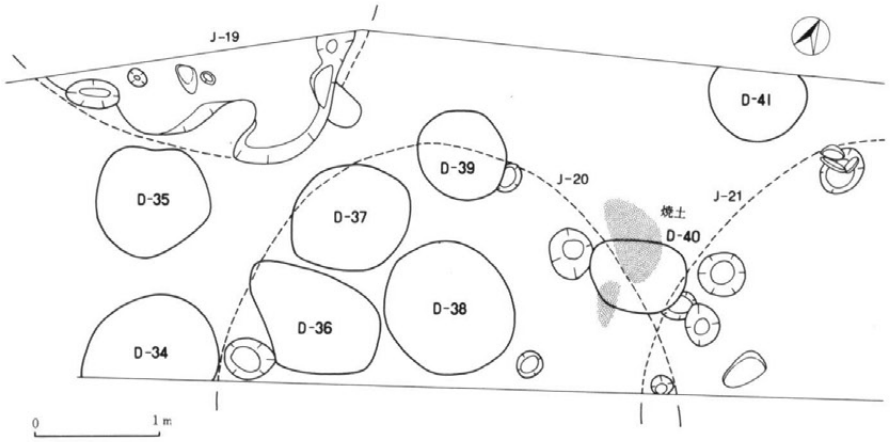


第21図　J－18号住居址実測図（1：60）

図版29　J－18号住居址
（北方より、手前がJ－18・その向うがJ－17号住居址）



図版30　J－18号住居址（西方より）

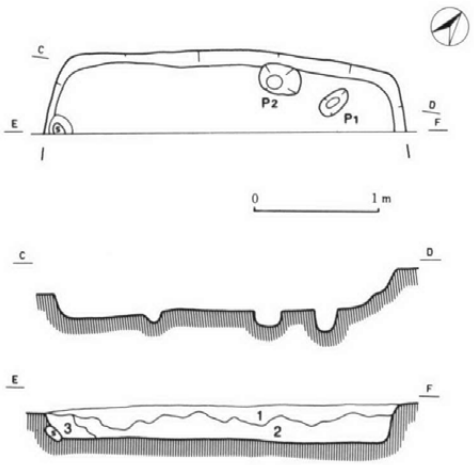


第22図　J—19・J—20・J—21号住居址実測図（1：60）

図版31　J—20号住居址（西方より）

図版32　J—21号住居址（東方より）

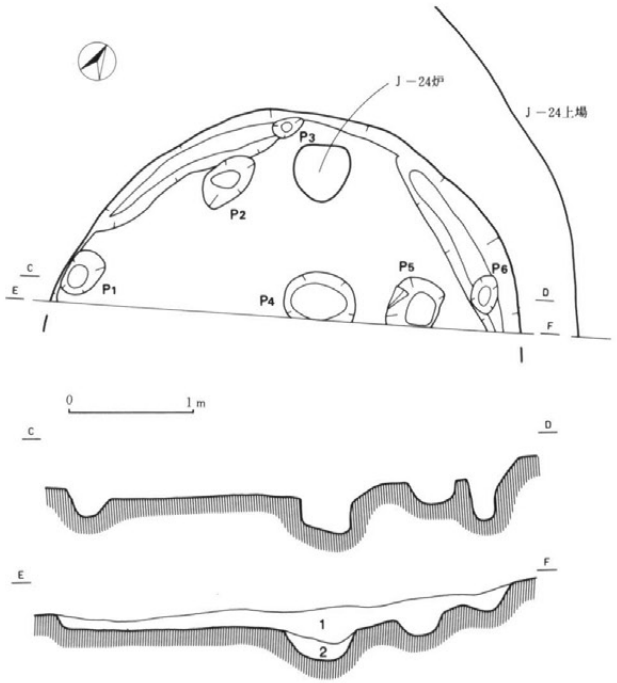
図版33　J—19号住居址（西方より）



1．黒色土層　粘性なくパサパサしている。パミスを含む。
2．暗色土層　粘性なくパサパサしている。パミスを含む。
3．褐色土層　ローム層のブロック状堆積。

第23図　J－22号住居址実測図（1：60）

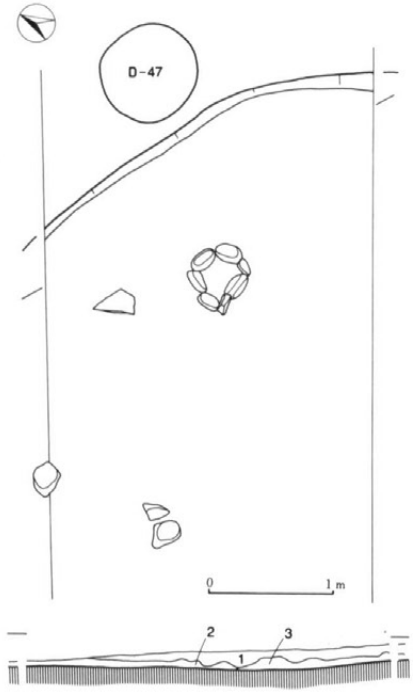
図版34　J－22号住居址（南方より）



1．黄茶褐色土層　パミス少量混
2．黄茶褐色土層　パミス多量混

第24図　J－23号住居址（1：60）

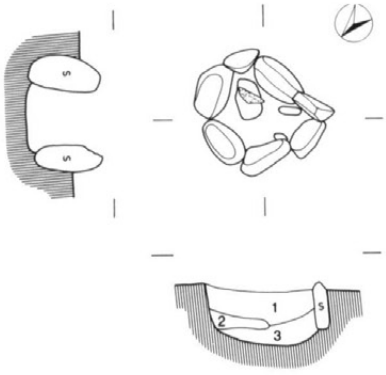
図版35　J－23号住居址（東方より）



1．暗色土層　粒子細かく粘性なし、パミスを含む。
2．褐色土層　粒子細かく粘性なし、パミスを含む。
3．黒色土層　粒子細かく粘性なし、パミスを含む。

第25図　J－24号住居址（1：60）

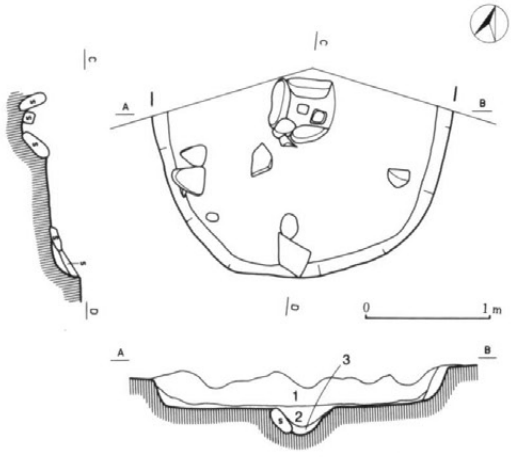
図版36　J－24号住居址（西方より）



1．暗色土層　カーボン粒子を含み、パサパサしている。
2．ロームブロック
3．暗褐色土層　しまりがなく、パサパサしている。

第26図　J－24号住居址炉実測図（1：30）

図版37　J－24号住居址炉（西方より）

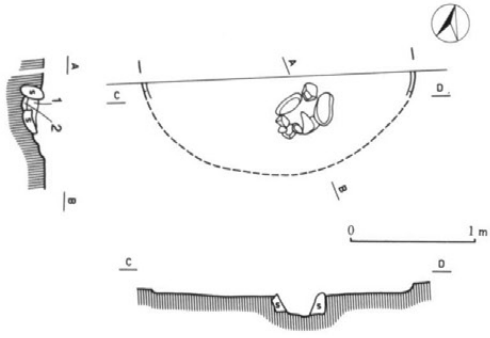


1．黒色土層　粒子細く粘性無し。
2．黒色土層　焼土、カーボンを含む。
3．暗黒色土層　若干のカーボンを含む。

第27図　J－25号住居址実測図（1：60）

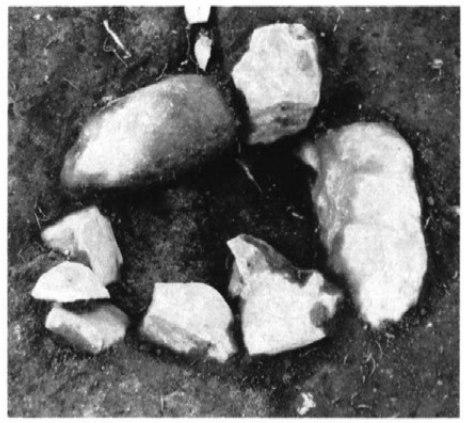
図版38　J－25炉（東方より）

図版39　J－25号住居址（西方より）



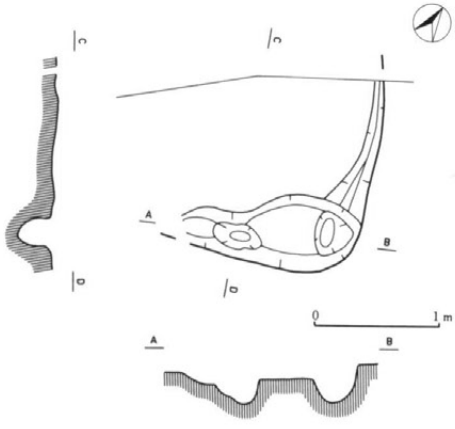
1．暗色土層　粘性なくパサパサしている。
2．暗褐色土層　焼土、カーボンを含み、粘性なくパサパサしている。

第28図　J－26号住居址実測図（1：60）

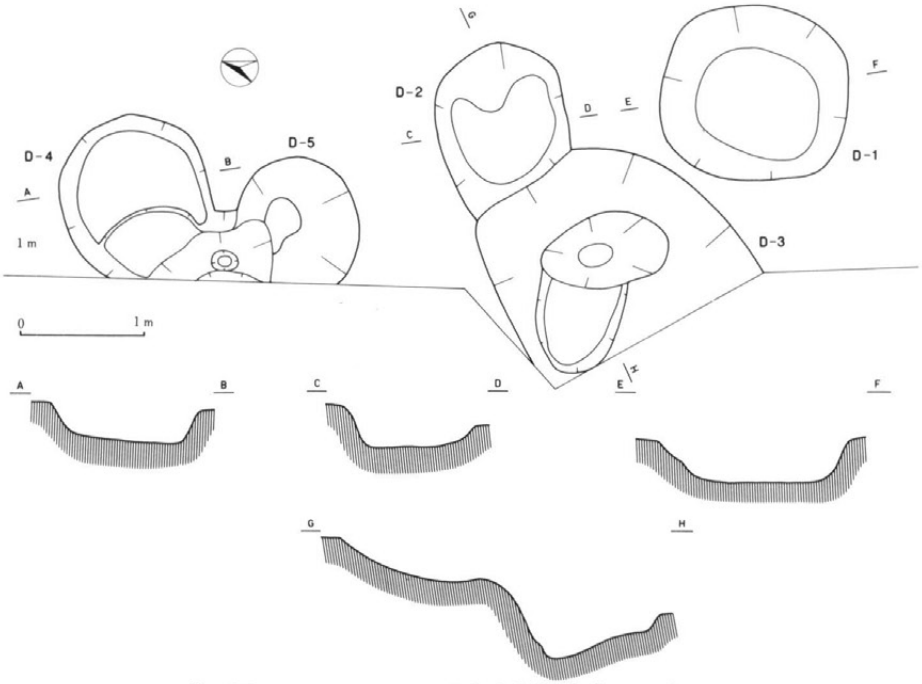


図版40　J－26炉（南方より）

図版41　J－26号住居址（南方より）



第29図　J－27号住居址実測図（1：60）

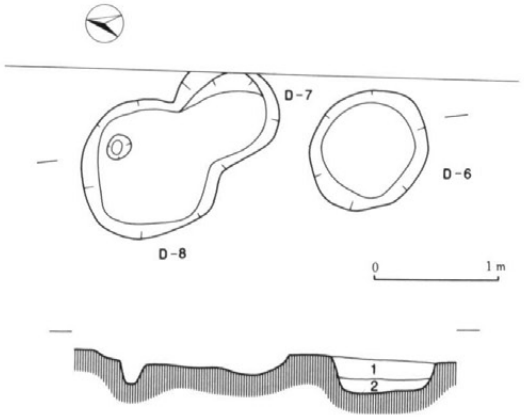


第30図　D－1 ～D－5 号土壙実測図（1：60）

図版42　D－1（南方より）

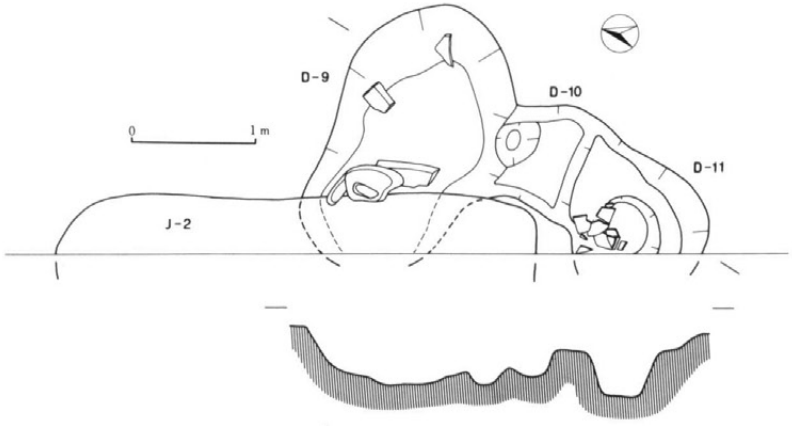
図版43　D－1　D－3（南方より）

図版44　D－4・D－5（北東より）

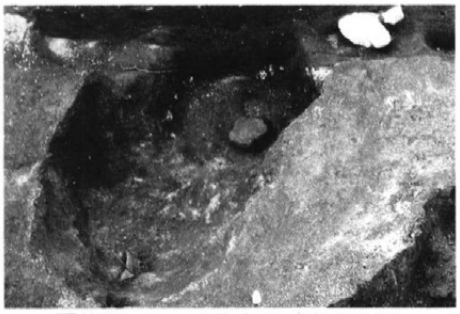


1．黒褐色土層　ローム粒子を多量に含む、炭化物・パミス混。土器出土。
2．茶褐色土層　ローム粒子・パミス混。

第31図　D－6～D－8号土壙実測図（1：60）



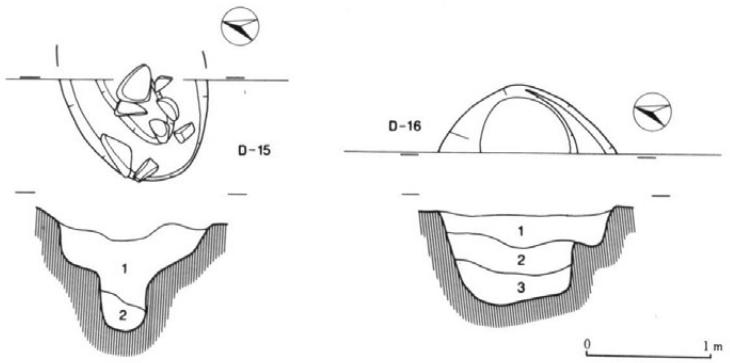
第32図　D－9～D－11号土壙実測図（1：60）



図版45　D－9号土壙（東方より）

図版46　D－11号土壙（東方より）

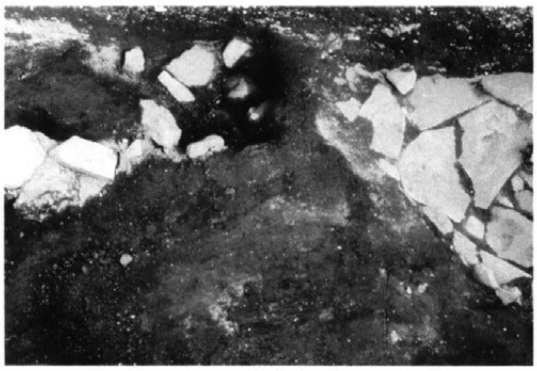
図版47　D—12号土壙（西方より）



1．明茶褐色土層　カーボンを含む。
2．茶褐色土層　カーボンを含み
ややしまりあり。

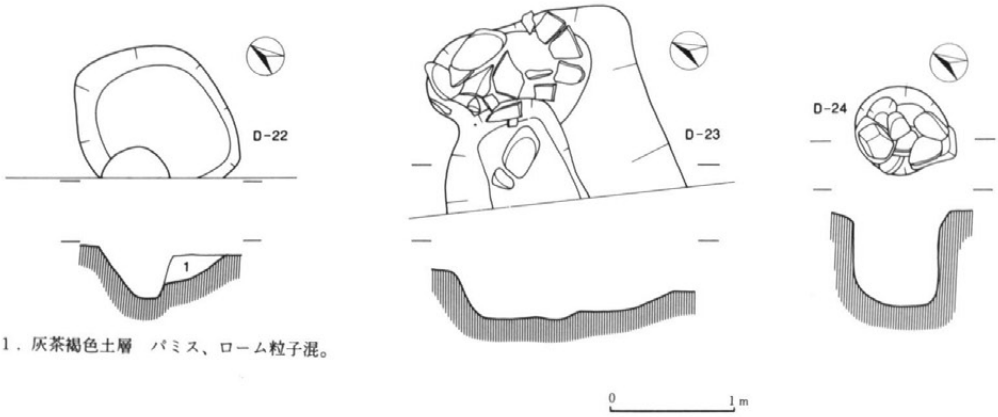
1．茶褐色土層　1cm大のスコリアを含む。
2．暗褐色土層　1cm大のスコアを若干含む。
3．褐色土層　1cm大のスコリアを少量含む。

第33図　D—15・D—16号土壙実測図（1：60）



図版48　D—15号土壙（西方より）

図版49　D—16号土壙（東方より）

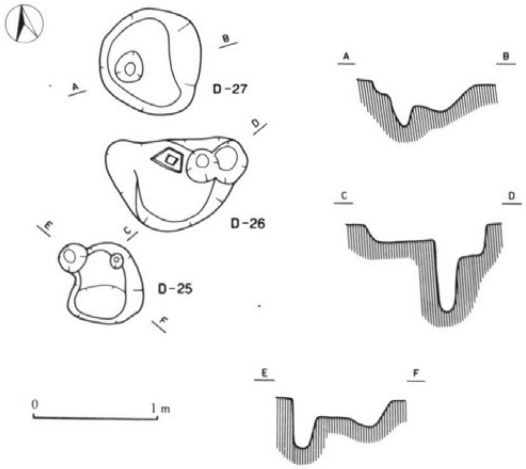


1．灰茶褐色土層　パミス、ローム粒子混。

第34図　D—22・D—23・D—24号土壙実測図（1：60）

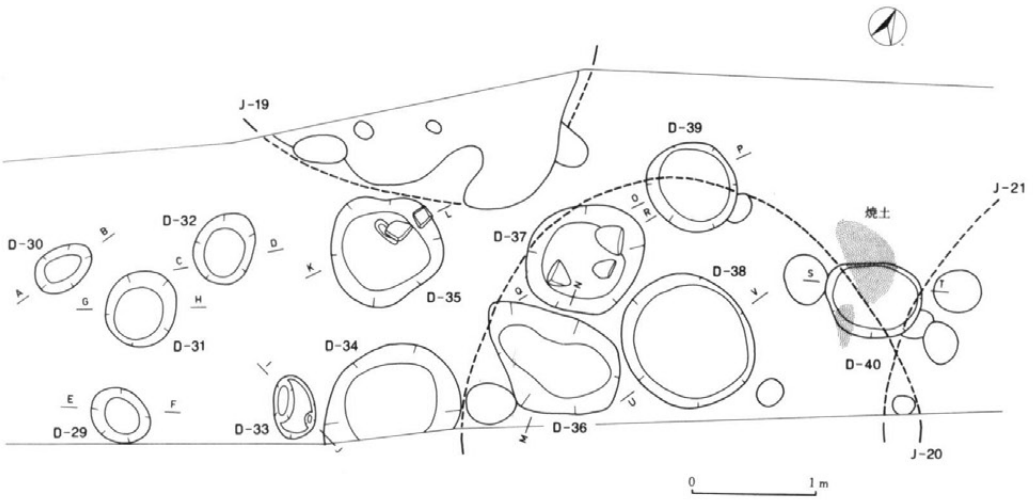
図版50　D—23号土壙（南方より）

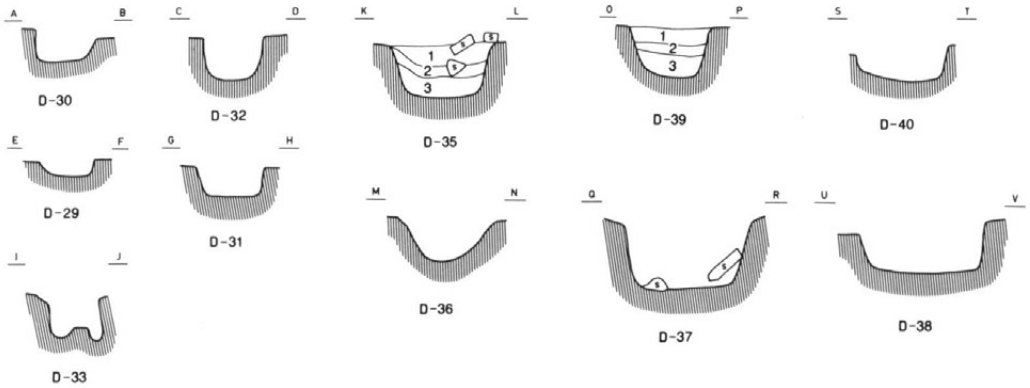
図版51　D—24号土壙（南方より）



第35図　D—25・D—26・D—27号土壙実測図（1：60）

図版52　D—25・D—26・D—27（東方より）



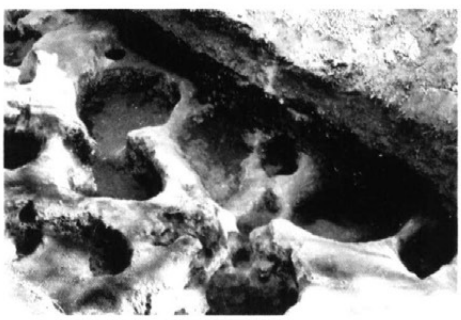


D－35土層説明
1．暗色土層　　パサパサしている。
2．黒色土層　粘性ややあり。
3．黄褐色土層　多量のローム粒子を含む。

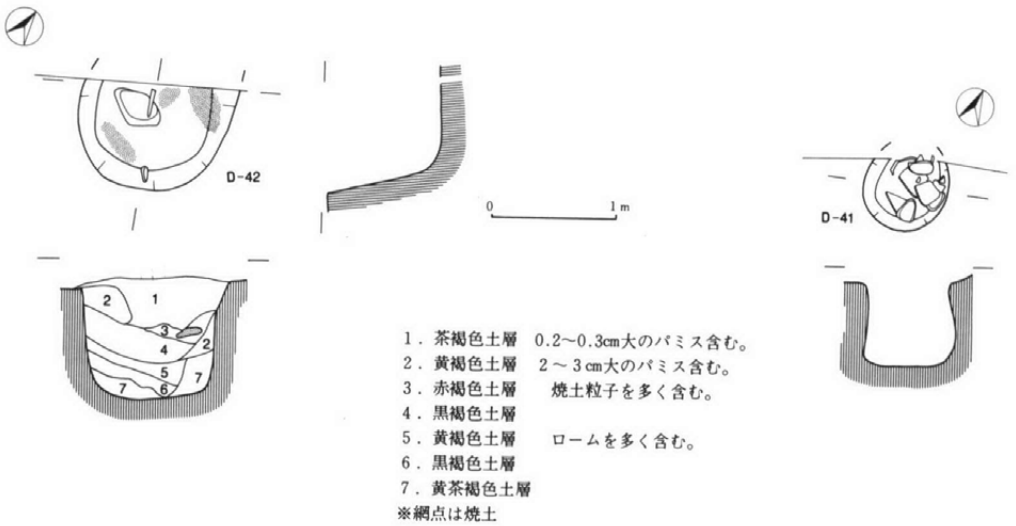
D－39土層説明
1．黒色土層
2．暗色土層
3．黄褐色土層　カーボンを含む、ローム粒子混入。

第36図　D－29～D－40号土壙実測図（1：60）

図版53　D－35・D－37・D－39（南より）

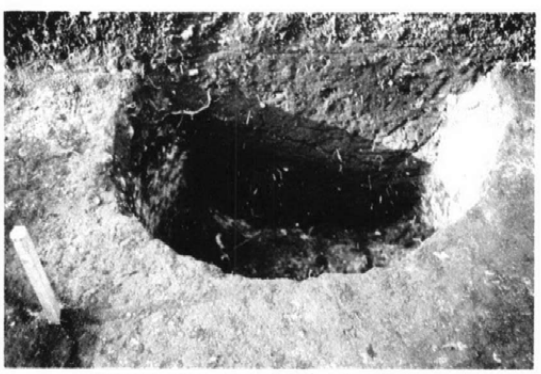


図版54　D－34～D－40（東より）



1．茶褐色土層　0.2～0.3cm大のパミス含む。
2．黄褐色土層　2～3cm大のパミス含む。
3．赤褐色土層　焼土粒子を多く含む。
4．黒褐色土層
5．黄褐色土層　ロームを多く含む。
6．黒褐色土層
7．黄茶褐色土層
※網点は焼土

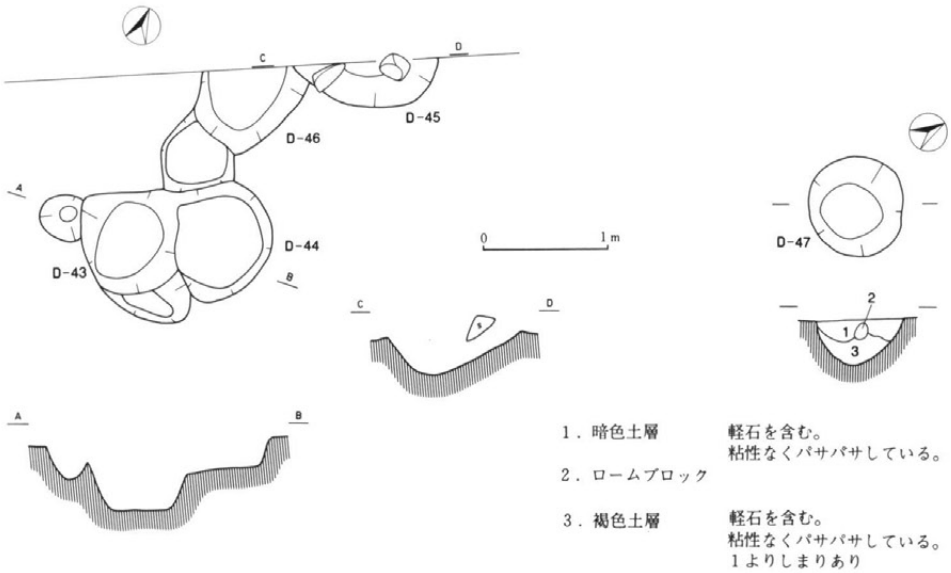
第37図　D－41・D－42号土壙実測図（1：60）



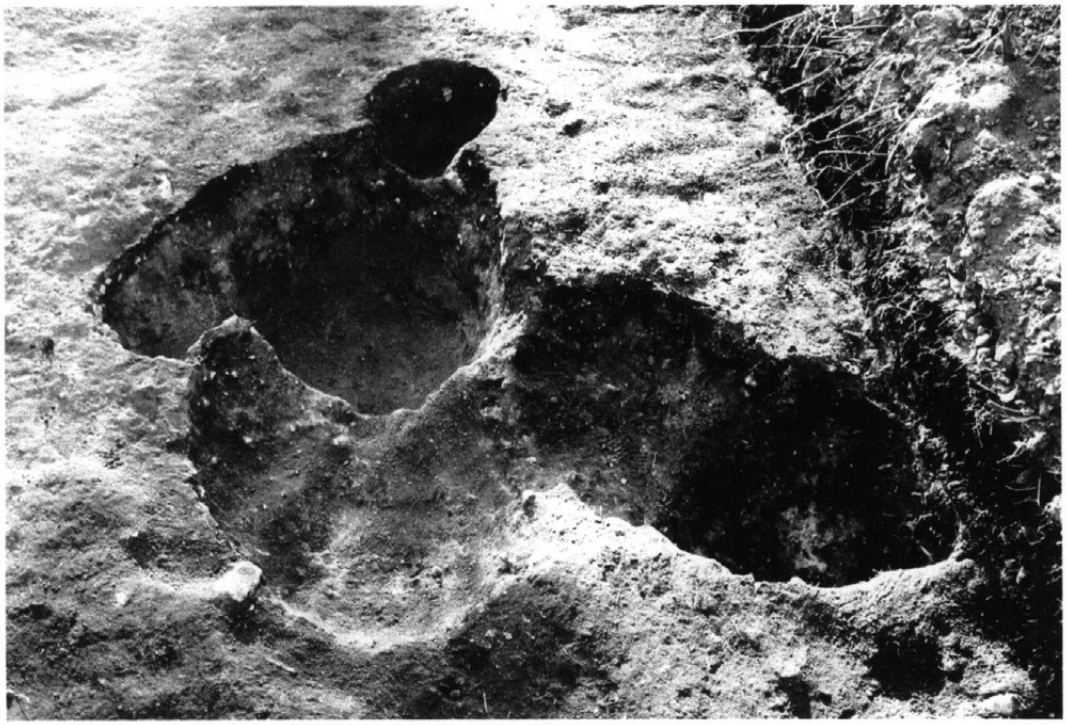
図版55　D－42号土壙（南方より）

図版56　D－41号土壙（西方より）

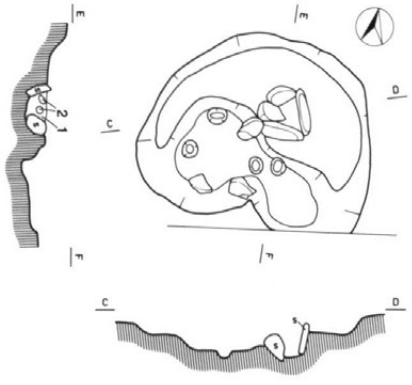
図版57　D－41号土壙（南方より）



第38図　D－43～D－46・D－47土壙実測図（1：60）



図版58　D－43～D－45号土壙（東方より）

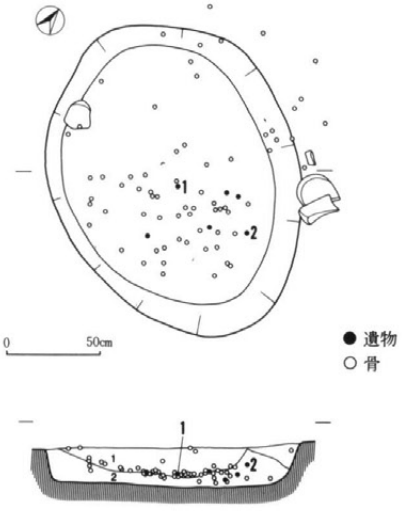


1．暗色土層　　粘性なくパサパサして粒子が細かい。
2．ロームブロック　カーボン・焼土は全く含まない。

第39図　D－48号土壙実測図（1：60）

図版59　D－48炉（西方より）

図版60　D－48号土壙（北方より）

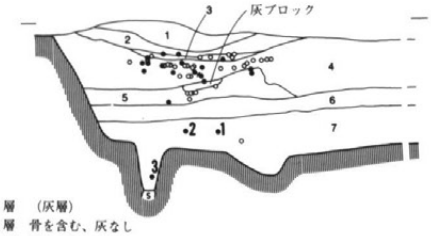


1．黒褐色土層　　炭火物混、灰を多少含む、骨片を含む、粘性弱。
2．灰色土層（灰層）　炭火物を多量・パミスを多少含む、骨片を含む。

第40図　D－50号土壙実測図（1：40）

図版61　D－50プラン（南東より）（白い帯は灰層）

図版62　D－50号土壙掘り上がり

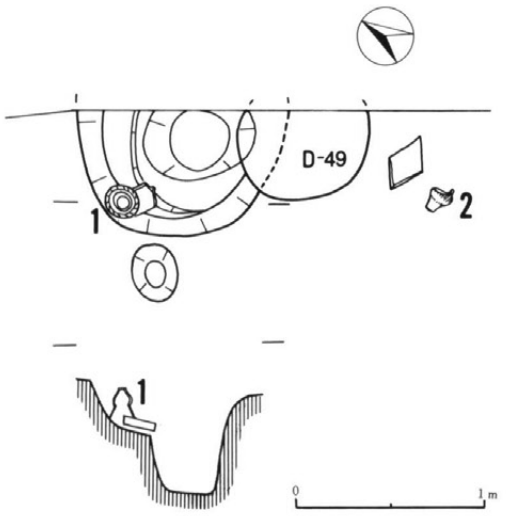


第41図　D—52号土壙実測図（1：40）

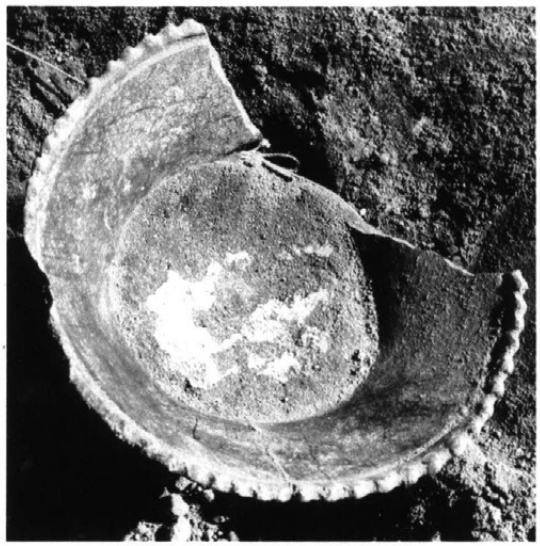
図版63　D—52土器出土状況

図版64　D—52骨出土状況

図版65　D—52号土壙掘り上がり（東方より）

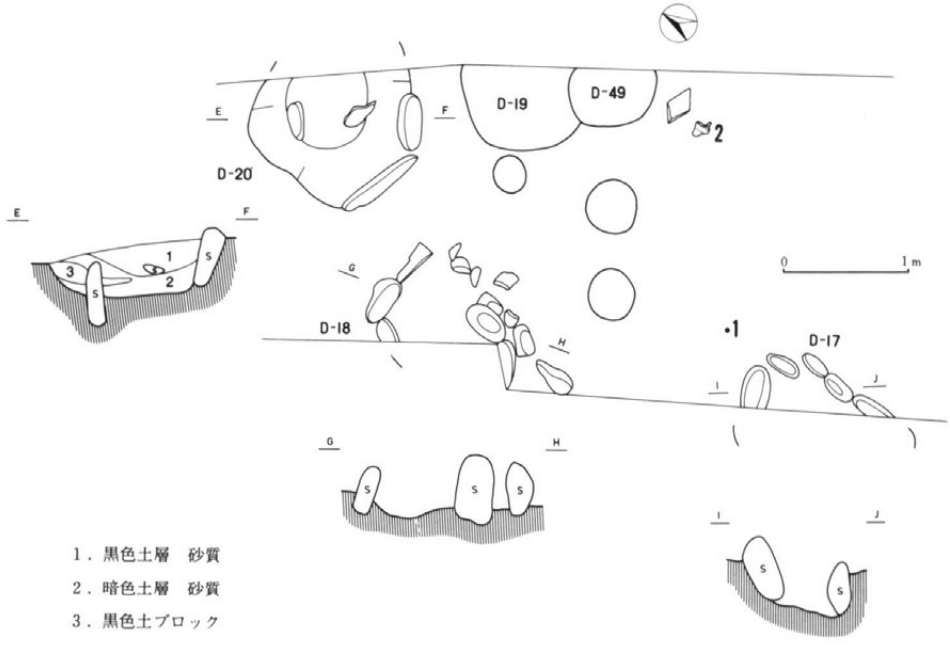


第42図　D－19号土壙墓実測図（1：40）



図版66　深鉢内の洗骨出土状況

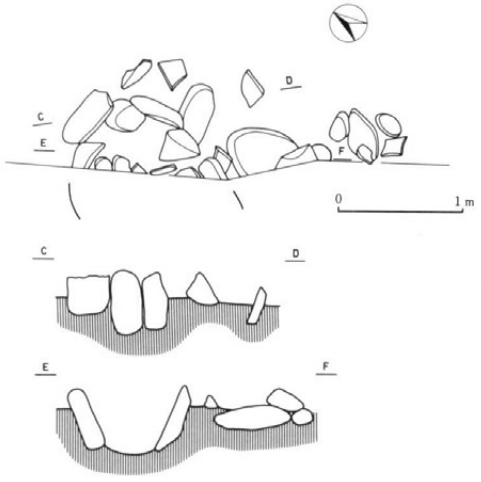
図版67　D－19号土壙墓（南方より）



第43図　D―17・D―18・D―20号石組み棺実測図（1：80）

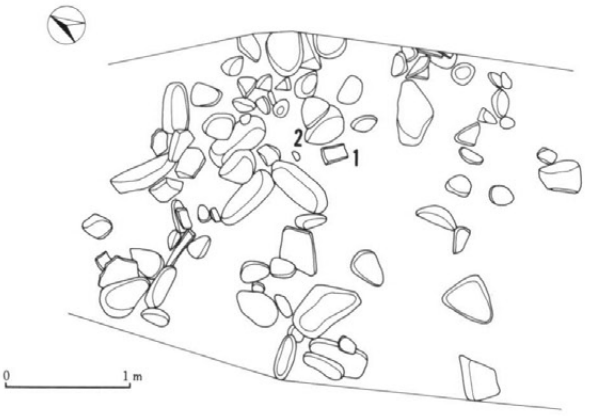
図版68　D―18号石組み棺（東方より）

図版69　D―20号石組み棺（西方より）



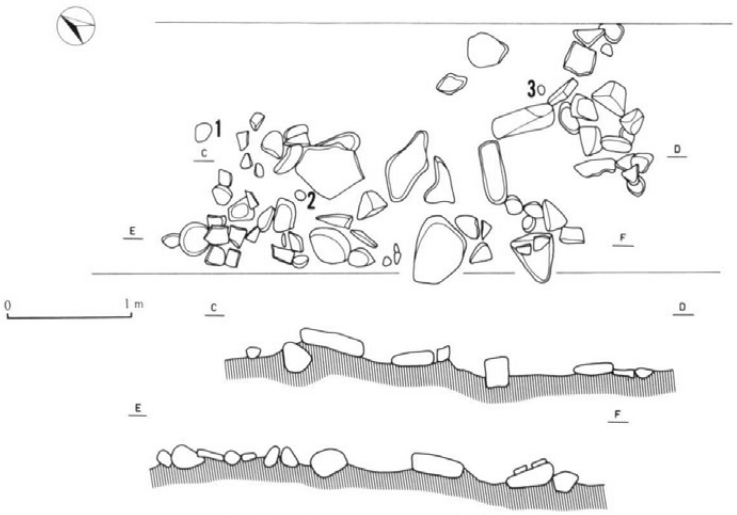
第44図　D－21号石組み棺実測図（1：60）

図版70　D－21号石組み棺（東方より）



第45図　R－1号礫群実測図（1：60）

図版71　R－1号礫群（東方より）



第46図　R－2号礫群実測図（1：60）

図版72　R－2号礫群　（東方より）

図版73　J－23号住居址付近より西を臨む

図版74　J－26付近より西へ臨む

図版75　J－3より南へ臨む

図版76　宮平遺跡より浅間を望む

宮 平 遺 跡

―発掘調査報告書―

遺 構 編

昭和60年３月30日発行

編 集　御代田町教育委員会
発 行　御代田町教育委員会
印 刷　信毎書籍印刷株式会社